

中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第18回訪日報告書

目次

報告書の刊行にあたって	1
中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社(者)一覧	2
2016年度中国日本商会役員名簿.....	3
2016年度社会貢献委員会委員名簿	5
2016年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿	6
朱丹団長挨拶	7
主催、共催団体の概要	8
第18回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団 団員名簿.....	9
第18回訪日ホームステイ受け入れリスト	10
第18回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程	11
第18回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト	12
< 訪日記録 >	
島津製作所 (5/25)/担当:清華大学	14
京都大学 (5/25)/担当:中央民族大学.....	16
アサヒビール神奈川工場 (5/27)/担当:中国人民大学	19
伊藤忠商事本社 (5/27)/担当:北京第二外国語大学	22
みずほ銀行本店 (5/30)/担当:対外経済貿易大学.....	25
早稲田大学 (5/30)/担当:清華大学	28
ニューオータニ(エコセンター)(5/31)/担当:北京工業大学.....	30
学生たちの感想文から	33
学生たちの観た日本	54
学生たちの撮った写真	71
第18回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日活動メディア報道リスト(中国語のみ).....	1

第18回中国大学生「走近日企・感受日本」 訪日団報告書の刊行にあたって

本報告書は、「走近日企・感受日本」事業の第2弾第8回(通算第18回)訪日団の報告書です。

本事業は、中国人大学生を訪日視察に招待派遣するもので、中国日本商会在会員からの寄付金を原資として、2007年から年に2回実施しており、今回派遣した18回までで29大学562名の学生に参加をいただきました。

日本を訪れる中国人は近年急増しておりますが、「走近日企・感受日本」事業では、次代の中国を担う若者を派遣し、単なる観光では得られない体験を通じた“ふれあい研修”を行っています。日本企業の経営理念や現場力の視察、大学生との意見交流、日本人一般家庭でのホームステイなどを盛り込み、日中両国民の相互理解の進化が進むよう努力しております。

さて、第18回は、2016年5月24日から5月31日までの8日間、清華大学、中国人民大学、对外経済貿易大学、北京第二外国語学院、中央民族大学に中日交流活動ボランティア枠として北京工業大学を加えた6大学から選抜した29名を日本に派遣し、参加者の感動とともに無事終了することができました。

視察企業は、島津製作所(京都)、アサヒビール神奈川工場(神奈川)、伊藤忠商事(東京)、みずほ銀行(東京)、ホテルニューオータニエコセンター(東京)の5社。この他、京都大学、早稲田大学における日本人大学生との交流、中国大使館の訪問、日比谷松本楼の視察、一泊二日のホームステイ体験など多岐にわたるプログラムを組みました。ホームステイの受入に協力いただいた企業は13社(アルプス電気、伊藤忠商事、新日鐵住金、住友商事、全日空、テルモ、トヨタ自動車、日本貨物航空、日本郵船、丸紅、みずほ銀行、三井物産、三菱商事)にのぼっています。

このように「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会の会員企業の多大なる協力と貢献のもとに実施されています。また、共催団体である中国日本友好協会にも全面的な協力をいただくとともに、訪日団の受け入れや本報告書の編集には、一般財団法人日中経済協会に多大なるご尽力をいただいております。加えて、寄付金の管理は、中国側では中国友好和平発展基金会、日本側では公益社団法人企業市民協議会(CBCC)にご協力をいただいております。改めて、本事業実施にご支援、ご尽力をいただいたすべての関係者に厚くお礼を申し上げます。

本事業が日中相互の国民レベルでの理解促進の一助となり、将来さらに大きな実を結ぶことになれば、これに勝る喜びはありません。

中国日本商会 会長 古場文博

2016年7月

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」 寄付金申込社（者）一覧

【寄付金】750万円

1	アサヒグループホールディングス株式会社
2	伊藤忠(中国)集団有限公司
3	新日鐵住金株式会社
4	住友商事(中国)有限公司
5	全日本空輸株式会社
6	東芝(中国)有限公司
7	トヨタ自動車(中国)投資有限公司
8	日本航空株式会社
9	日立(中国)有限公司
10	丸紅株式会社 丸紅(中国)有限公司
11	株式会社みずほコーポレート銀行
12	三井物産株式会社
13	三菱商事株式会社
14	三菱電機(中国)有限公司
15	三菱東京 UFJ 銀行(中国)有限公司

【寄付金】350万円以上～750万円未満

1	日本電気株式会社
2	キヤノン(中国)有限公司
3	住友化学投資(中国)有限公司
4	ソニー(中国)有限公司
5	三井住友銀行(中国)有限公司

【寄付金】100万円以上～350万円未満

1	あいおいニッセイ同和損保株式会社
2	旭化成株式会社
3	旭硝子(中国)投資有限公司
4	アルプス(中国)有限公司
5	岩谷産業株式会社
6	日本たばこ産業株式会社
7	日本郵船株式会社
8	NTTグループ
9	JTB 新紀元国際旅行社有限公司
10	JX日鉱日石エネルギー株式会社
11	双日株式会社
12	第一生命株式会社
13	株式会社電通
14	東京海上日動火災保険株式会社 東京海上日動火災保険(中国)有限公司
15	日揮株式会社
16	日産(中国)投資有限公司
17	野村證券株式会社
18	三井化学株式会社
19	三井住友海上火災保険株式会社 三井住友海上火災保険(中国)有限公司
20	三井住友信託銀行
21	三菱ケミカルホールディングス株式会社
22	三菱重工業(中国)有限公司

【寄付金】10万円以上～100万円未満

1	株式会社 IHI
2	アルパイン(中国)有限公司
3	株式会社荏原製作所
4	エプソン(中国)有限公司
5	華昇富士達電梯有限公司
6	住金物産株式会社
7	住友生命保険相互会社
8	ソニー生命保険株式会社
9	大和証券株式会社
10	宝酒造株式会社
11	電源開発株式会社
12	東工物産貿易有限公司
13	東曹達(上海)貿易有限公司
14	トヨタモーターファイナンスチャイナ
15	日本生命保険相互会社
16	テルモ(中国)投資有限公司
17	日本農林中央金庫有限公司
18	ハウス食品株式会社
19	日立高新技术(上海)国際貿易有限公司
20	株式会社ブリヂストン
21	北京丘比食品有限公司
22	三井不動産諮詢(北京)有限公司
23	三菱マテリアル株式会社
24	三菱 UFJ 証券有限公司
25	三菱 UFJ 信託銀行
26	明治安田生命保険相互会社
27	明宝工程塑料商貿(上海)有限公司
28	矢崎(中国)投資有限公司
29	理光軟件研究所(北京)有限公司
30	株式会社ワコールホールディングス
31	成川 育代(個人会員)
32	柳田 洋(個人会員)

2016年度中国日本商会役員一覧

2016年6月度現在

	商会役職	氏 名	会社名	役職
1	会長	古場 文博	住友商事	常務執行役員 東アジア総代表
2	副会長	杉浦 康誉	アサヒグループホールディングス	常務執行役員 中国総代表
3	副会長	上田 明裕	伊藤忠	常務執行役員 東アジア総代表
4	副会長	吉田 直樹	NEC(中国)	中国総代表 兼 総裁
5	副会長	小澤 秀樹	キヤノン	専務執行役員 董事長
6	副会長	西浦 新	新日鐵住金	常務執行役員 中国総代表 北京事務所長
7	副会長	阿部 信一	全日本空輸	上席執行役員 中国総代表 北京・天津支店長
8	副会長	豊原 正恭	東芝	執行役上席常務 中国総代表
9	副会長	大西 弘致	トヨタ自動車	専務役員 中国本部長
10	副会長	篠田 邦彦	日中経済協会	北京事務所 所長
11	副会長	田端 祥久	日本貿易振興機構	北京事務所 所長
12	副会長	鳥居 敬三	丸紅	常務執行役員 中国総代表
13	副会長	網野 良一	みずほ銀行(中国)	董事長
14	副会長	金森 健	三井物産	専務執行役員 中国総代表
15	副会長	松井 俊一	三菱商事	常務執行役員 東アジア統括
16	副会長	柳岡 広和	三菱東京UFJ銀行(中国)	董事長
17	副会長	松下 聡	三菱電機	執行役員 中国総代表
18	理事	亀倉 隆志	岩谷産業	執行役員 中国総代表
19	理事	後藤 政郎	双日	常務執行役員 中国総代表
20	理事	椿本 光弘	豊田通商	執行役員 東アジア総代表
21	理事	田中 健二	阪和商貿	董事長 総経理
22	理事	陶 履徳	日鉄住金物産	北京事務所 所長
23	理事	藤森 洋一	IHI	北京代表処 首席代表
24	理事	青山 傑	コスモ石油	北京事務所 首席代表
25	理事	市川 孝	クボタ	北京事務所 首席代表
26	理事	池松 克紀	JFEエンジニアリング(北京)	総経理
27	理事	権田 昌二	JXエネルギー	執行役員 中国総代表 北京事務所長
28	理事	明石 宏二郎	東京電力	北京代表処 首席代表
29	理事	劉 曉峰	日揮	北京事務所 所長
30	理事	今井 正志	アルプス(中国)	総経理
31	理事	堂園 憲治	NTTコミュニケーションズ(中国)	北京分公司 総経理
32	理事	今村 浩	NTT DOCOMO China通信技術	董事長
33	理事	稲葉 雅人	NTTデータ	執行役員 中国総代表
34	理事	後藤 雄次	京瓷(中国)商貿	董事・総経理

35	理事	高橋 洋	ソニー(中国)	董事長&総裁
36	理事	大澤 英俊	パナソニックチャイナ	常務役員 中国・北東アジア総代表
37	理事	小久保 憲一	日立製作所	執行役常務 中国総代表
38	理事	北野 滋	富士通(中国)	総経理
39	理事	桜井 博之	マルチメディア振興センター	北京代表処 首席代表
40	理事	結城 成貴	旭化成	北京事務所 首席代表
41	理事	西山 寛	アステラス製薬(中国)	総経理 特別顧問
42	理事	中山 泰一	資生堂(中国)投資	技術部 部長
43	理事	西 広信	住友化学投資(中国)	総経理
44	理事	陳 偉東	日健中外科技(北京)	総経理
45	理事	柴崎 崇紀	テルモ(中国)投資	董事長 総経理
46	理事	寺師 啓	東レ	北京事務所 所長
47	理事	本田 和秀	凸版印刷	北京事務所 首席代表
48	理事	福山 裕二	三井化学	常務理事 中国総代表
49	理事	瀬川 拓	三菱ケミカルホールディングス	執行役員 中国総代表
50	理事	宮崎 守	あいおいニッセイ同和損害保険	駐中国総代表処 中国総代表
51	理事	和田 健治	日本銀行	北京事務所 首席代表
52	理事	李 永梅	日本生命	北京事務所 首席代表
53	理事	森下 純也	農林中央金庫	北京駐在員事務所 首席代表
54	理事	宋 曉晨	みずほ証券	北京駐在員事務所 首席代表
55	理事	川端 良彦	三井住友銀行(中国)	北京支店長
56	理事	松尾 純利	日通国際物流(中国)	社長
57	理事	江利川 宗光	日本航空	執行役員 中国総代表 北京支店長
58	理事	磯田 裕治	日本郵船	経営委員 中国総代表
59	理事	三枝 富博	イトーヨーカ堂(中国)投資	董事長
60	理事	高羽 人志	JTB	中国総代表 董事長
61	理事	大谷 隆一	北京博報堂	北京分公司 総経理
62	理事	谷口 利英	全日空国際旅行社	総経理
63	理事	高橋 修三	長富宮中心	常務副総経理 ホテル総支配人
64	理事	馬場 章正	北京電通広告	董事 総経理
65	理事	戸村 滋見	北京発展大廈	董事 総経理
66	理事	田淵 真次	日中経済貿易センター	専務理事 北京事務所長
67	理事	中下 裕三	日本国際貿易促進協会	北京事務所 中国総代表
68	理事	越智 博通	北京陸通印刷	董事長
69	理事	林田 哲也	電通テック(北京)	総経理代理
70	理事	小金井 英生	世達志不動産投資顧問(上海)	北京分公司 総経理
71	理事	篠原 康人	三井住友海上火災保険(中国)	北京分公司 総経理
72	理事	上辻 尚美	宝酒造食品有限公司	総経理
73	監事	三浦 智志	監査法人トーマツ	パートナー
74	監事	越智 幹文	国際協力銀行	首席代表

2016年度社会貢献委員会委員名簿

	氏 名 （会社名・役職）
社会貢献委員長	金森 健 （三井物産 専務執行役員 中国総代表）
委員	杉浦 康誉 （アサヒグループホールディングス 常務執行役員 中国総代表）
委員	上田 明裕 （伊藤忠 常務執行役員 東アジア総代表）
委員	吉田 直樹 （NEC(中国) 中国総代表 兼 総裁）
委員	小澤 秀樹 （キヤノン 専務執行役員 董事長）
委員	西浦 新 （新日鐵住金 常務執行役員 中国総代表 北京事務所長）
委員	古場 文博 （住友商事 常務執行役員 東アジア総代表）
委員	阿部 信一 （全日本空輸 上席執行役員 中国総代表 北京・天津支店長）
委員	豊原 正恭 （東芝 執行役上席常務 中国総代表）
委員	大西 弘致 （トヨタ自動車 専務役員、トヨタ自動車(中国)投資 董事長）
委員	篠田 邦彦 （日中経済協会 北京事務所 所長）
委員	田端 祥久 （日本貿易振興機構 北京事務所 所長）
委員	鳥居 敬三 （丸紅 常務執行役員 中国総代表）
委員	網野 良一 （みずほ銀行(中国) 董事長）
委員	松井 俊一 （三菱商事 常務執行役員 東アジア統括）
委員	柳岡 広和 （三菱東京UFJ銀行(中国) 董事長）
委員	松下 聡 （三菱電機 執行役員 中国総代表）
委員	江利川 宗光 （日本航空 執行役員 中国総代表 北京支店長）
委員	石毛 二郎 （交通公社新紀元国際旅行社 董事 総経理 ）

2016年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	金森 健	三井物産 専務執行役員 中国総代表
【WG座長】	篠田 邦彦	日中経済協会 所長
アサヒグループホールディングス(株)	飯塚 喜美子	行政局主任
伊藤忠(中国)集团有限公司	石津 顕太郎	中国人事・総務部
キャノン(中国)有限公司	小林 宏樹	コーポレートコミュニケーション戦略本部高級経理
新日鐵住金(株) 北京事務所	濱崎 由基	部長
交通公社新紀元国際旅行社有限公司	石毛 二郎	董事 総経理
住友商事(中国)有限公司	中原 誠	人事部 部長
	米 健	総代表付
全日本空輸株式会社	新井 哲朗	銷售部
東芝(中国)有限公司	東口 雄一郎	総裁室 室長
トヨタ自動車(中国)投資有限公司	栗田 弘毅	渉外部主査
(財)日中経済協会	澤津 直也	副所長
日本航空株式会社	藤井 智之	営業部 マネージャー
日本貿易振興機構 北京事務所	日向 裕弥	副所長
日立(中国)有限公司	宮田 剛志	信息資源本部 公共関係部 副総経理
丸紅(株) 北京事務所	松園 大	中国総代表助理
	栗間 涼	中国総代表業務助理
みずほ銀行(中国)有限公司 北京支店	林 彦伯	グローバルコーポレート業務部
三井物産(中国)有限公司	佐々木 有司	業務部 部長
三菱商事(中国)有限公司	石 薇	企画業務部マネージャー
三菱電機(中国)有限公司	原 正英	副総経理
三菱東京UFJ銀行(中国) 北京支店	張 婷	企画部 北京本部
【オブザーバー】	菊池 信太郎	日本大使館 広報文化センター 書記官
【オブザーバー】	柴戸 ひとみ	日本大使館 経済部 書記官
【訪日中のアテンド等】	横山 勝明	日中経済協会 (東京) 参与

第18回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团報告書 団長挨拶

2016年5月24日から31日にかけて、第18回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团一行33名は、日本での8日間の訪問を行いました。期間中は、中国日本商会、日中経済協会そして各企業や学校の関係者のご協力ならびにご支援の下、代表団の訪日活動は無事そして円満に期待通りの成果をあげることができました。

今回の代表団は清華大学、中国人民大学、對外経済貿易大学、北京第二外国語学院、中央民族大学そして北京工業大学の優秀な学生及び引率教員により構成されています。日本滞在期間中、代表団は京都、箱根、東京等の地を訪れ、島津製作所、アサヒビール、みずほ銀行、伊藤忠商事、ホテルニューオータニの5つの特色ある大企業を見学し、また京都大学や早稲田大学の学生と踏み込んだ交流をし、さらには日本の一般家庭においてホームステイ体験をいたしました。そして日本企業の進んだ技術や経営理念、環境保全意識を学び、日本の自然景観を堪能し、日本の伝統文化を体験し、さらには日本の人々と深い友情を育むなど、充実したスケジュールの下で多くの収穫を得ることができました。団員らは充実したこの8日間において、細かな観察や思考を通して様々な角度から日本を認識し、それらを日記形式にまとめました。ここに団員らの今回の日本訪問における思いを皆様へご紹介させていただきます。皆様にはこの報告書から、団員らの収穫や感動といったものを感じ取って頂ければ光栄に存じます。

国の交わりは民の親しさにあります。中日の友好関係の発展には、両国の人々、特に若い世代の理解と積極的な関わりが求められます。中日両国の若者らが手を携え、共に学び進歩することで、中日友好交流における架け橋となり、両国の発展に貢献していくことを心から願っています。中日友好協会としましても、日本の各界の皆様と共に両国の民間及び草の根交流をより活発化し、両国の人々の相互理解と友情を促進し、中日関係のさらなる発展に向け、たゆまず努力をしていく所存でございます。

最後に、今回の代表団の訪日に際して多大なご支援を頂いた中国日本商会、日中経済協会及び各関連企業の皆様に、心より感謝申し上げます。

第18回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团 団長
中日友好協会副秘書長
朱丹

主催、共催団体の概要

中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2016年6月末日現在、市内法人会員613社、市外法人会員49社、個人会員14名、賛助会員11名の合計687社(名)を擁している。

中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同発展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

一般財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

第18回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿

	姓名	性別	所属		専攻
団 長	朱 丹	女	中国日本友好協会	副秘書長	
団 員	王宝源	男	清華大学	化学系	化学
団 員	李維唐	男	清華大学	化学系	化学
団 員	陳文鋐	女	清華大学	化学系	化学
団 員	殷 晨	女	清華大学	化学系	基礎科学(化学生物学)
団 員	万正一	男	清華大学	化学系	基礎科学(化学生物学)
団 員	于孟鑫	女	中国人民大学	外国語学院	日本語
団 員	倪 楠	男	中国人民大学	外国語学院	日本語
団 員	史 蕊	女	中国人民大学	外国語学院	日本語
団 員	鄭雨奇	女	中国人民大学	外国語学院	日本語
団 員	鐘锦涛	男	中国人民大学	外国語学院	日本語
団 員	江 涵	女	對外經濟貿易大学	外語学院	日本語(經濟貿易専攻)
団 員	吳佳芮	女	對外經濟貿易大学	外語学院	日本語(經濟貿易専攻)
団 員	王雨薇	女	對外經濟貿易大学	外語学院	日本語(經濟貿易専攻)
団 員	黄 静	女	對外經濟貿易大学	外語学院	日本語(經濟貿易専攻)
団 員	何鑫穎	女	對外經濟貿易大学	外語学院	日本語(經濟貿易専攻)
団 員	胥 珂	女	北京第二外国語学院	日語学院	日本語
団 員	熊 璋	女	北京第二外国語学院	日語学院	日本語
団 員	鄒璐璐	女	北京第二外国語学院	日語学院	日本語
団 員	許禄野	女	北京第二外国語学院	日語学院	日本語
団 員	袁偉傑	男	北京第二外国語学院	日語学院	日本語
団 員	龍順欣	女	中央民族大学	外国語学院	日本語
団 員	李欣竹	女	中央民族大学	外国語学院	日本語
団 員	申成日	男	中央民族大学	外国語学院	日本語
団 員	鄭縁童	女	中央民族大学	外国語学院	日本語
団 員	底家銘	男	中央民族大学	外国語学院	日本語
団 員	楊中清	女	北京工業大学	建築工程学院	建築環境、エネルギー応用工学
団 員	曾 檬	女	北京工業大学	計算機学院	IOT工学
団 員	于鑫淼	女	北京工業大学	機電学院	計測制御技術及び計測器
団 員	尚 芳	女	北京工業大学	環境・能源工程学院	環境科学
団員(引率教員)	李淑芳	女	對外經濟貿易大学	港澳台・日本事務	主管
団員(引率教員)	陶 藝	女	中央民族大学	外国語学院日語系	主任
団員(事務局)	王 麟	男	中国日本友好協会	都市・經濟交流部	職員

第18回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

日次	日 付	日 程	宿 泊
1	5/24 (火)	14:20 北京→18:20 関西 (NH980便) 18:20 関西国際空港着 19:30～20:30 夕食: 関西空港 20:30～22:00 夕食後京都へ移動 22:00 ホテル着	京都新・都ホテル 京都市南区西九条院 町17 TEL: 075-661-7111
2	5/25 (水)	8:30 ホテル発 9:00～12:00 ●企業訪問① (島津製作所) 12:15～13:15 昼食: 京都 14:00～20:00 ◎京都大学交流① (含む懇親会) 20:30 ホテル着	京都新・都ホテル
3	5/26 (木)	8:45 ホテル発 9:30～12:00 ★ソフト文化視察 嵐山 (周恩来記念碑)、金閣寺 12:30～13:25 昼食: 京都駅 13:56京都→15:55三島 ひかり470 (新幹線体験) 三島駅着後 芦ノ湖へ移動 芦ノ湖眺望コース 17:00～17:30 恩賜箱根公園より芦ノ湖眺望 18:00 箱根温泉着 ★温泉体験 夕食: 温泉旅館内にて和食会席料理	箱根天成園 神奈川県足柄下郡箱 根町湯本682 TEL: 0460-83-8511
4	5/27 (金)	8:00 ホテル発 9:30～12:30 ●企業訪問② (アサヒビール神奈川工場) (含む昼食) 14:30～16:00 ★ソフト文化視察 日比谷松本楼 16:30～19:30 ●企業訪問③ (伊藤忠商事) 20:00 ホテル着	東京 ホテルニューオータニ 東京都千代田区紀尾 井町4-1 TEL: 03-3265-1111
5	5/28 (土)	終日 <u>ホームステイ</u>	学生: ホームステイ 引率者: ホテルニュー オータニ
6	5/29 (日)	夕方までホームステイ 夕方 ホテル集合、東京都内自由行動	東京 ホテルニューオータニ
7	5/30 (月)	9:15 ホテル発 10:00～13:30 ●企業訪問④ (みずほ銀行) (含む昼食) 14:00～15:30 ●中国大使館訪問 16:00～21:00 ◎早稲田大学交流② (含む懇親会) 21:15 ホテル着	東京 ホテルニューオータニ
8	5/31 (火)	9:30～11:30 ●企業訪問⑤ ホテルニューオータニ エコ視察 12:00～13:45 歓送会 (ホテルニューオータニ) 14:00 ホテル発 羽田空港へ移動 15:00 羽田空港着 17:25羽田→20:15北京 (NH963便) 20:15 北京首都国際空港着 (到着後、自由解散)	

第18回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト

1. 島津製作所 (5月25日)

西田 悟	海外事業開発部	企画管理課	京都グループ	グループ長
杜 淑英	海外事業開発部	企画管理課	京都グループ	
山下 和子	海外事業開発部	企画管理課	京都グループ	
山岸 仁美	経営戦略室	企画管理ユニット	総務グループ	

2. 京都大学 (5月25日)

川添 信介	副学長・理事			
韓 立友	国際高等教育院	准教授		
家本 太郎	国際高等教育院	付属日本語・日本文化教育センター	准教授	
近藤 直	大学院農学研究科	教授		
ルチラ パリハワダナ	国際交流センター	教授		
馬淵 光正	教育推進・学生支援部	国際教育交流課	課長	
廣瀬 泰子	教育推進・学生支援部	国際教育交流課		
塩出 道子	教育推進・学生支援部	国際教育交流課		
徳川 鈴奈	PUKU実行委員会			
于 再治	PUKU実行委員会			

* 京都大学の学生の皆様(26名)

石塚 健一	京都府	国際課	留学生政策	担当課長
山口 紳	京都府	国際課	主事	
齊藤 健一		コーディネーター		
吉田 浄		コーディネーター		

春野 一彦	NHK京都放送局	放送部	記者	
岩田 敏則	日本経済新聞社	京都支社	支局長	

3. アサヒビール 神奈川工場 (5月27日)

鎌田 寿賀子	見学担当			
--------	------	--	--	--

4. 日比谷松本楼 (5月27日)

小坂 文乃	代表取締役	副社長		
吉田 俊秀	専務取締役			
今井 康雄	営業部	部長		

5. 伊藤忠商事 (5月27日)

岡本 均	代表取締役専務執行役員			
------	-------------	--	--	--

小野 博也 CSR・地球環境室 室長
 寺澤 佳代 開発・調査部 海外室 エリアマネジャー(東アジア)
 佐藤 ますみ 開発・調査部 海外室
 角田 理子 開発・調査部 海外室
 上林 若菜 開発・調査部 海外室
 石津 顕太郎 伊藤忠(中国)集团有限公司 中国経営企画事業部 部長助理
 ＊社内各カンパニーから選抜された中国語人材31名、ホームステイ受け入れ2名の皆様

6. みずほ銀行 (5月30日)

菅野 暁 みずほフィナンシャルグループ 執行役専務
 廣瀬 俊 みずほ銀行中国営業推進部 部長
 白井 和樹 みずほ銀行中国営業推進部 次長
 姚 瑾 みずほ銀行中国営業推進部 調査役
 葉 嵐 みずほ銀行中国営業推進部
 西尾 和之 みずほ銀行東京中央支店 副支店長
 高下 裕一郎 みずほ銀行グローバルマーケッツ業務部 市場管理チーム 調査役
 小林 謙 みずほフィナンシャルグループ
 コーポレート・コミュニケーション部
 広報室 調査役

7. 中国大使館 (5月30日)

薛 剣 政治部 公使参事官
 邵 宏偉 友好交流部 一等書記官
 王 磊 友好交流部 二等書記官

8. 早稲田大学 (5月30日)

白木 三秀 政治経済学術院 教授
 石倉 拓一 国際部 国際課
 沈 向琮 国際部 国際課
 津村 聡 国際部 国際課
 アダムス マーシャル 広報室 広報課
 ＊白木ゼミナールの皆様

9. ホテルニューオータニ (5月31日)

山川 剛 関西営業所 所長
 河合 純 宿泊営業部 国内営業課 課長
 田島 浩一 宿泊営業部 国内営業課 アシスタントディレクター
 山田 聡 料飲営業部 料飲営業一課 シニアセールスマネージャー
 山本 正巳 ファシリティーマネージメント部 マネージャー
 三浦 光昌 ファシリティーマネージメント部 係長

科学技術企業の信念と思い

清華大学学生代表

見学日時：2016年5月25日（水） 09:00-12:00

見学場所：島津製作所本社・島津製作所創業記念資料館

見学概要

島津製作所は1875年に京都で創業以降、「科学技術で社会に貢献する」という社是に則り、141年にわたり絶えず業務を拡大し、現在では73の関係会社と11000人あまりのスタッフを有し、売上高3422億円を超える国際的企業となっている。そして医薬品、環境、食品、医療、材料、エネルギー、電子半導体設備などの面で社会に対して非常に大きな貢献をしている。現在同社の業務範囲は、分析機器、試験検査・測定機器、医用機器、航空機器、産業機器などで、そのうち分析機器が最も有名である。

明治維新の後、京都府は産業の発展政策を推進し、当時35歳だった仏具職人の初代島津源蔵は島津製作所の前身である教育用理化学器械の製造工場を設立した。1877年12月、初代島津源蔵は様々な模索を経て、5万人が見守る中、日本初の有人軽気球の飛揚に成功し、島津源蔵と島津製作所の名誉と地位を向上させた。1894年、初代島津源蔵の急逝により、二代目島津源蔵が父の遺志を引き継ぎ、X線写真撮影や蓄電池製造などの新技術を確立し、日本の産業と科学技術の発展に多大な貢献をした。1930年、二代目島津源蔵は日本の発明界における最も偉大な十大発明家の一人に選ばれた。それと同時に同社は積極的に国際提携を展開し、1968年にはドイツに子会社を設立した。20世紀の後半、日本経済や日本企業の高速成長に伴い、分析・測定機器の需要が日増しに増加したことから、同社は分析・測定機器の事業を始め、自動車のランダム振動シミュレーション試験機など、日本の自動車の低故障率の名声獲得に貢献している。



島津製作所が開発した日本初のガスクロマトグラフ

今後も、島津製作所は豊かな社会の実現のため、様々な新事業を展開していく。そしてあらゆる困難に対しても従来通りそれに立ち向かい、問題を克服し、科学技術による社会貢献を続けていく。

知っていますか？

問：島津製作所のスタッフの中にノーベル賞受賞者がいるが、それは誰か？

答：田中耕一 (Koichi Tanaka) 氏。彼は1983年に東北大学工学部電子工学科を卒業後、島津製作所の研究開発エンジニアとなった。彼とアメリカの化学者ジョン・フェン等は共同で「生体高分子の質量分析法(ソフトレーザー脱離イオン化法)」を開発、基質を使いレーザーによるタンパク質の分子のイオン化をサポートし、タンパク質の分子の破壊を防ぎつつ質量分析機器での質量分析を可能とした。これにより田中耕一氏は2002年にノーベル化学賞を受賞した。

問：レントゲンがX線を発見してから、島津製作所はどのくらいで最初のX線写真を撮影したのか？

答：ドイツの物理学者レントゲンは1895年11月8日にX線を発見した。それから11ヵ月後、島津製作所はX線写真の撮影に成功し、1909年には医療用X線装置を開発した。同社が当時制作したX線装置は世界をリードするもので、「島津製作所を知らない医者には優秀な医者ではない」という言葉が医学界で広まった。

問：島津製作所にとっての最大の海外市場はどこの国か？

答：中国は島津製作所にとって最大の海外市場で、売上高の16%を占めている。同社は中国に8つの関係会社を置き、1700名を超えるスタッフが研究開発、生産、販売、アフターサービスなどに従事している。島津製作所はこれからも中国市場を重視し、中国の発展に貢献していく。

感想

清華大学化学学部の学生と島津製作所には切れない縁が存在する。島津製作所の質量分析計、ガスクロマトグラフ、高速液体クロマトグラフなどの分析機器は、化学分野において幅広く使用されている。私たちが1年生だった当時、島津企業管理(中国)有限公司北京分公司を見学したことがある。そしてこの学期に選択履修した機器分析科目においても、多くの同社の機器について触れていたが、まさに百聞は一見に如かずで、今回の島津製作所本社の見学では、とても大きな収穫が得られた。

私は島津製作所の成功について、まず同社の社是である「科学技術で社会に貢献する」という点と深い関係があると思う。社会への貢献は上限や終わりが無いからこそ、島津製作所は絶えず科学技術の極限にチャレンジし、世界の潮流を牽引することができるのである。



訪日団団員が島津製作所前で記念撮影

日本のノーベル賞受賞者の揺籃を訪ねて—京都大学

中央民族大学学生代表

見学日時：2016年5月25日（水） 14:00-20:00

見学場所：京都大学

見学概要

5月25日午後2時、第18回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日団は京都大学に到着した。まず初めに、教室にて京都大学の先生から歓迎の挨拶と、京都大学の歴史や現状についての詳細な紹介があり、その後私たち代表団は京都大学の学生と共に4つのグループに分かれ、エネルギー問題・人工知能問題・貿易協定問題および教育問題について熱のこもった討論をし、最後に各グループの代表がそれぞれ5分間の総括発表を行った。発表の後、中日双方の学生および先生は京都大学内で行われた懇親晚餐会へ参加した。今回の交流を通じ、私たちは日本のキャンパス文化についてより深く知ることができた。



知っていますか？

問：京都大学はなぜ日本におけるノーベル賞受賞者の揺籃となっているのか。

答：現在、科学技術分野のイノベーションおよびイノベーション人材やグローバル人材の育成は、一流大学における最重要課題となっている。京都大学は自由な学風の尊重により、科学技術分野のイノベーションや人材育成を推し進めており、これは京都大学設立当初からの基本理念でもある。京都大学では、ほぼ全ての教員や学者が基礎教育に携わっており、学生は学部の垣根を越えて全ての専攻の講座やゼミに参加が可能で、一流の学者と触れ合い、さらに最先端の研究現場において視野を広げることができる。こうした自由な学風の下、京都大学はすでに9名のノーベル賞受賞者と2名のフィールズ賞受賞者など多くの世界的科学研究分野のリーダーを輩出している。

この他、京都大学は日本の自然科学研究における重鎮として、人文学科についても非常に重視している。京都大学の優れた物理・生物・医学など自然科学研究と並び称されるのは、「京都学派」と呼ばれる西田哲学と中国学

研究である。京都大学では多くの自然科学学者が同時に人文・社会科学研究にも従事している。京都大学の山極総長自身が携わっている霊長類研究も、自然科学と社会科学の学際境界領域である。山極総長は昨年の京都大学でのTDExイベントの席上、チンパンジーの研究を通じた暴力性の成因について、「科学だけを頼っている、人類は幸福にはなれず、また生存していく勇気を得ることもできない」と述べている。こうした人間本位の理念も、京都大学が多くのノーベル賞受賞者を輩出してきた主な理由の一つである。



問：京都大学の教育体制や学術研究は中国国内の大学と比べて何が違うのか。

答：団員A：京都大学の学術的気風は中国国内と比べてより気軽で自由である。調査によると、学生の本当の興味や自身の潜在能力の啓発のため、京都大学には多くの特徴的な試みがある。例えば一部の専攻では、その他の専攻の履修単位での代替が可能で、専攻科目を含むほぼ全ての講義で出欠はとらず、学部の変更も比較的容易である。これらは中国国内の大学との大きな違いである。

団員B：私にとって最も印象深かったのは、京都大学の学術研究者の驕りがなく、手を抜かないといった学問に対する着実な姿勢である。京都大学における著名なショウジョウバエの実験を基に言えば、1954年に生物学者の森主一氏がショウジョウバエの暗黒飼育を始め、60年以上経過した現在まで継続されている。1500世代を経たこれらのショウジョウバエには、暗黒状況下での生活に完全適応するために遺伝子に数十カ所の変異が見られている。学者たちの長年に渡るひたむきな観察研究といった、功をあせらない根気強さや変わらない意思是、中国の大学の研究者が学ぶべきものである。

感想

今回の京都大学への訪問や学術交流を通じてとても感慨深いものがあった。ここでは中日両国の学術研究について感想を述べたいと思う。

まず初めに研究面において、中国には人文学科、特に文学・歴史・哲学などの学科を軽視する風潮が存在している。中国の学生の積極性やモチベーションは日本の学生より高いが、歩みを緩やかにし、心を落ち着けて、「当面何の役にも立たない」ものに対して時間や労力を使うことも必要かもしれない。森教授のショウジョウバエの実験のような科学研究プロジェクトは、中国の科学研究環境において生存していくことができるだろうか。こうした研究の応用価値について疑問を持つ人がいるのではないか。また論文発表回数や被引用回数で研究者を評価する人がいるのではないか。もちろん森教授もこのショウジョウバエの観察だけをしていたわけではなく、他の研究プロジェクトも行っていたであろう。但し、こうした研究が中国において生き残る余地があるのかどうか、これこそ私たち学問を修める者が自問しなければならないことであり、また現在の学術政策の制定者が考えなければならないことである。大国そして世界規模のエコノミーとして、日の目を見ない研究を願っている一部の科学者に対して、単純で一見応用価値が無いかもしれない科学的問題について考える余地と条件を提供しなければならない。

次に、現在中国の大学生は日本の大学生と同様に IT ツール、インターネットやソーシャルメディアなどに日頃から依存しており、実際の学習や生活は狭く小さな範囲に限られるといった内向的な傾向にあり、それにより偏った、そして極端な考え方がだんだんと増えている。そのため、学生に対しさらに社会实践や対話、そして国際的な研修や実習の機会を提供し、学生が野性的でたくましい精神を育み、自ら積極的に探究し、本当の知識を身に付けるようにしなければならない。まさに山極総長が提唱する、京都大学が現代において直面している状況に対しての改革に向けた新たな計画である「WINDOW 構想」のように、「世界や社会に通じた窓を開け、風通しをよくし、野生的で賢い学生を育てる」ことが必要である。

他者を利して自身の利益とすることこそ真の利益

中国人民大学学生代表

見学日時：2016年5月27日（金） 09:30-12:30

見学場所：アサヒビール神奈川工場



見学概要

アサヒビールの歴史は120年前までに遡り、これまで日本のビールブランドのトップ3の座を維持し続けている。「スーパードライ」ブランドは日本で唯一年間販売量が1億箱を超えたブランドである。アサヒビールは企業として名高いだけでなく、その製品を通じて私たちに楽しさと満足感を与えている。

朝9時30分、私たちはアサヒビール神奈川工場へ到着し、ホールで解説スタッフから今日のスケジュールの紹介を頂いた。その内容は主に会社紹介ビデオの観賞、工場見学およびビール体験の三つであった。飲酒ができない未成年の団員を確認した後、私たちは今日の最初の活動に入った。

私たちはまず初めにアサヒビールの会社紹介ビデオを観賞し、同社の発展の歴史や経営理念および現在の生産・運営メカニズムなどアサヒビールについて基本的な理解を得た。会社の目標は「美味しい」ビールの製造であるが、それだけでなく一企業として社会的責任も担っている。そのため、アサヒビールは環境保護を重視しており、環境に優しく、資源を再利用することで循環型社会を構築し、美しい自然を将来へ残している。

次いで私たちは解説スタッフの引率の下、原料・糖化工程・発酵熟成工程・ろ過工程および包装工程などビール製造の各工程段階を順に見学した。製造過程全体はハイテク化されており、神奈川工場の製造ラインでは1秒間に25缶のビールを生産することができ、1分間では1500缶と、生産効率是非常に高い。また私たちは同社のビール品質に対する重視の度合について理解を深めることができた。各工程が機械で精密に操作されているだけでなく、スタッフはその味覚を通じて絶えずビールの検査をしているのであった。

最後に私たちは皆で同社のビールを試飲し、爽やかで滑らかな口当たりと黒ビールの深い香りを体感した。今回私たちはアサヒビールに対する知識の他、美味しいビールも味わうことができた。ビールを飲みながら皆で今回の見学の感想を語り合うなど、リラックスした雰囲気の中、私たちはアサヒビールでの見学を終えた。

知っていますか？

問：アサヒビールの原料は？

答：神奈川工場において私たちは、麦芽やホップそして水といったビールの主要原料を目にし、またその香りを体験することができた。アサヒビールでは、粒が大きく、澱粉が多く、適度にタンパク質を含んだ皮の薄い二条大麦を使用しており、これはビールの生産に非常に適している。次にホップはビールに独特の香りとうま味を加え、またビールを澄み切らせ、雑菌の繁殖を抑え、泡立ちや泡持ちの効果を有している。さらに水中のミネラルの質と量がビールの口当たりなどに大きく影響するため、アサヒビールでは、ろ過した良質の水を使用している。アサヒビールはビールの品質を追求するという一貫したモットーに従い、麦の一粒、水の一滴からホップの一つに至るまで、自身の厳しい基準に適した原料のみを使用している。また酵母も厳選されたもので、最先端の技術と設備を使い厳しく管理された製造過程を経て、出来立てのビールの味を完全に留めることで、消費者が爽やかな口当たりを楽しむことができるのである。

問：アサヒビールの工場において、美味しいビールはどのように生産されているのか？

答：まず麦芽の製造工程において、黄金色の大麦に水と空気を与え発芽させる。その後、熱で乾燥させ根を取り除き麦芽とする。そしてその麦芽は糖化工程に入り、一部の麦芽は米、とうもろこし、澱粉などの副原料と一緒に糖化釜の熱水に入れて煮しめ、残った麦芽は糖化槽の熱水に入れた後糖化釜に入れる。こうすることで、液体中の澱粉が麦芽糖に変わる。糖化槽で生成した麦汁をろ過した後、ビール特有の香りをつけるため、ホップを麦汁に入れて煮沸し、渦流器により不純物を取り除き冷却する。冷却後の麦汁はビール製造において最も重要な工程である発酵熟成に入る。麦汁に厳選したビール酵母を入れ発酵させると、麦汁中の糖分が酵母菌によりアルコールと炭酸ガスに分解され、生成された「麦のジュース」を数十日かけて熟成し、ろ過することで黄金色の生ビールが誕生する。しかしここでは終わらず、アサヒビールでは毎日専門の検査スタッフが造られたばかりのビールに対して官能検査を行い、終始変わらないビールの美味しさを維持している。最後に、造られたビールは瓶、缶、樽に詰められる。またビールの鮮度を維持するため、その自動化生産ラインは1分間に350ml缶を1500缶（約163箱）というスピードで生産をしている。そして内容量などの厳しい製品検査をパスしたものが箱詰めされ出荷される。

問：アサヒビールは自然の保護のためにどのようなことを行っているか？

答：見学を通じて、私たちはアサヒグループが自然の保護のためにとても大きな貢献をしていることを知った。日本のすべてのアサヒビール工場では、会社スタッフと現地住民が共に水源地の保護活動をしており、除草、植樹、枝打ちなどにより、水源地の森林などの健全な成長を確保し、現地の生物の多様性を保護している。この他、私たちが最も感動したのは、広島県庄原市と三次市に広がる社有林であるアサヒの森をアサヒビールが70年以上にわたって守っており、現在では2165ヘクタールにまで成長しているということである。この森の中には「アサヒ森の子塾」と呼ばれる場所があり、そこでは現地の児童を対象として森林環境教育活動が行われている。森林での自然体験を通じて、子供たちは二酸化炭素隔離および生物多様性の保護など森林が担う役割について身を以て体験し、環境保護の重要性を学んでいる。アサヒビールの環境保護意識や社会的責任感は、こうしたことから見て取ることができる。

問：アサヒビールを飲んだことはありますか？アサヒビールはどのように「最高の品質をお客様にご提供する」という目標を実現しているか知っていますか？

答：アサヒビール神奈川工場の見学の最後に、私たちは美味しい同社のビールを試飲することができた。その口当りはまろやかで、泡も非常にきめ細かく、また香りもとても良いなど、こうしたことからアサヒビールは確かに「最高の品質をお客様にご提供する」という目標のために、たゆまぬ努力を続けているということが感じられた。アサヒビールは独自に研究開発した辛口特級酵母に、独特の発酵技術を組み合わせることで、渋みがなく、かつ香りが良

く、辛口のビールを造りだしたのである。この他、この目標は製造面にも表れている。アサヒビールはビールの鮮度への基準が非常に高く、生産から8日前後が最も美味しい。そのため8日間でお客様の手元に届くように、同社ではディーラーの在庫や物流などの問題を総合的に考慮している。こうした「トータルフレッシュマネジメント」もアサヒビールの主要な管理目標である。

感想

アサヒビールの製品開発における初志は、私たちにとって印象深いものであった。彼らはビールを売るためだけにビールを生産しているのではなく、消費者の視点から、消費者が求める美味しいビールを造りだすためにビールを生産しているのである。仮にこうした思いがなければ、製品を売るためだけに生産することになり、心をこめた生産や改良をすることはなく、「どっちみち自分の製品を買う人がいるのだから、品質はこだわらない」という態度で、真剣な生産、さらにはより優れた製品の生産を追求したりはしないであろう。ただしアサヒビールには、こうした消費者を思う心があり、まさにそのため彼らは生産工程や生産技術そしてビールの味の改善を継続し、消費者へキレのある口当たりを提供しているのである。

またこうした思いはアサヒビールのビール生産における各工程にも表れている。原料の選択から最後の箱詰めまで、各工程は真剣にまた念入りに行われている。アサヒビールは高品質のビールを生産するというモットーに則り、先進的技術により厳しく原料を選択し、麦の一粒からホップの一つ、そして水の一滴まで最も優れた原料を使用している。例えば水は、必ず澄み切っていて、無色無味、そしてろ過をした良質の水でなければならない。またアサヒビールでは内容量検査機などの機械による厳しい検査だけでなく、専門の検査スタッフを配置し、日々生産されるビールの味をチェックするという官能検査も行われている。こうした基盤があるからこそ、彼らは消費者が満足するビールを提供することができるのである。

この他、アサヒビールは社会や自然への恩返しを行っている。彼らは「低炭素社会の構築」・「循環型社会の構築」・「生物の多様性の保全」・「自然の恩恵を明日へ」といった四つのテーマに基づき環境保護事業に積極的に従事することで、社会の持続可能な発展のため貢献をしている。例えば、水源地において植樹や枝打ちをし、水源地の森林の健やかな成長を確保している。またビール瓶を回収し新たな瓶や建築資材に加工したり、瓶のふたを回収し鉄筋やH型鋼に加工したりするなど、資源の100%回収利用を実現し、ごみの発生を防いでいる。

日本では、企業がこうしたことをするよう法律で規定されているわけではないが、アサヒビールは自発的に自分たちの力で、生態環境の保護や社会資源の整備を行っている。これは多くの企業が見習うべきものであり、眼前の、また自身の利益だけにとらわれず、生態環境の破壊を代償とした利益獲得をせず、それとは反対に生態環境の保護に尽力しているのである。企業が利益を追求することは間違いではないが、利益の追求と同時に社会全体や自然についても考えなければならない。これはまた企業だけではなく、私たち個人も学ぶべきことである。現代社会において、私たち一人ひとは低炭素生活へ向けた努力をしなければならない。例えば、なるべく公共交通機関を利用し、ごみの分類をし、無駄を減らすなどである。大自然はそのきれいな水源、すがすがしい空気そして美しい土地で私たちを育てており、私たちもまた自然をいたわり、そして恩返しをしなければならない。一人ひとりの力は小さいかも知れないが、世界中の個人の力を合わせれば、それはとても大きなエネルギーとなるのである。

だからこそ、他者を利して自身の利益とすることが結果として最良の利益となるのである。私たちも、アサヒビールのように自身の利益を守ると同時に、人類、社会そして大自然について考え、自身の力で社会や自然に貢献し、相互利益を実現していかなければならない。

伊藤忠商事の企業文化を体験して

北京第二外国語学院学生代表

見学日時：2016年5月27日（金） 16:30-19:30

見学場所：伊藤忠商事株式会社

見学概要

伊藤忠商事株式会社は日本でも有名な大企業であり、今回の見学では視野を大きく広げることができた。

伊藤忠商事の見学では、まず初めにスタッフから会社の概況について詳しい紹介があった。その中で、伊藤忠商事の昨年度の純利益が日本の五大商社のトップであると知り、私たちはさらに強い気持ちでこの素晴らしい企業を知ろうと努めた。スタッフの解説を通じて、私たちは繊維、機械、金属、エネルギー・化学品、食料、住生活、情報・金融など同社の営業範囲の広さを知り、さらにそれぞれの分野において自身のブランドを起ち上げているということにとても感服させられた。また同時に、1972年に大型総合商社として初めて中日貿易再開の許可を受けて以降、これまで一貫して中国の歴史・文化、貿易習慣などに精通した中国語人材を育て、中国国内の各分野のトップ企業と提携パートナーシップを結び、中国との共同発展を実現してきたといった、伊藤忠商事と中国とのゆかりについても私たちは知ることができた。もちろん、伊藤忠商事がこれまで直面した様々な出来事に対して、同社の、またスタッフそして経営陣の頑張りにより今日の発展を収めることができたということ、紹介ビデオの観賞を通じて感じ、私たちは感動を覚えずにはいられなかった。

貴重な資料を見終え、またスタッフの解説を聞き終えた私たちは、興奮冷めやらぬまま同社が私たちのため準備してくれた晩餐会へ参加した。席上では同社の経営陣そして私たちの団長からのあいさつがあり、私たち新世代の青年にとっては収穫の多いものであった。また伊藤忠商事のスタッフとの交流では、彼らの私たちへの友好的な姿勢が感じられ、彼らのこれまでの仕事における様々な経験談を紹介してもらうなど、非常にためになった。それと同時に彼らからは、仕事に対するひたむきさとこだわりといった私たちが学ぶべきものが感じられた。



知っていますか？

問：「朝型勤務制度」を知っていますか。出勤後には残業をすることもあることは皆さん知っていますが、「朝型勤務制度」というのを聞いたことはありますか。

答：伊藤忠商事が2014年4月から正式に導入を始めた「朝型勤務制度」は、意識改革の一環である。夜の残業を朝にまわすのは、夜間の残業に比べて早朝の勤務は頭がより冴えるためであり、こうした改革の最大の目的としては、業務効率を高める以外に、また従業員のプライベート生活を豊かにすることにある。深夜まで残業することが常態化していた総合商社がこうした制度を実施することに、当初疑問を持つ人もいたが、現在では当然の制度として全社において実施されている。顧客から好評を博し、さらに業務効率を向上するという当初の目標効果を実現すると同時に、こうした進んだ取り組みは産業界のみならず、政府や行政機関においても広く注目を集めており、次第に社会における新たな動きとなっている。

問：伊藤忠商事のロゴの寓意は？

答：色合いは地球の青を想像させ、構図は地平線を思わせるもので、グローバル化の現在における企業発展の傾向を表し、発展の勢いが次第に増していくという着実に落ち着いた印象をあたえるものである。

感想

伊藤忠商事についての最初の印象は少しも手を抜かないということであった。こうした印象は自然に感じられるもので、触れることこそできないが、終始私に、伊藤忠のスタッフの完璧を求める姿勢を感じさせた。そして中国語の堪能な女性スタッフの解説とともに、伊藤忠商事の物語が徐々に展開された。

1858年に大きな使命を背負った商人たちがいた。

その後158年間、彼らの足跡は地球上のあらゆる場所に広がり、国を越えて暮らしと関わり、新たな生活文化を創り、ありとあらゆるものを力強く商ってきた。

「その商いは、未来を祝福しているのか？」彼らは常に自身に問いかけていた。そして探求を通じて、彼らはついに「豊かさを担う責任」という商いの本当の意味を悟った。これも彼らの存在意義を広く社会に伝えている。

日本において彼らは日頃から、中国でいうところの「梁山好漢」と同じ「野武士集団」と呼ばれている。彼らは豊かな個性を持った人の集まりで、自由闊達な風土を持った組織であり、「個の力」が非常に強い集団である。そしてスタッフ

一人ひとりがビジネスの現場で、マーケットが求めている商品やサービスを提供することで広く社会に豊かさを提供し続け、「商うこと」の先に広がる豊かさを提供していくことが、社会から認められ存続していくためには不可欠である。これらはまさに創業者である伊藤忠兵衛をはじめとする近江商人の経営哲学である「三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)」と一致する持続的発展の道筋であり、伊藤忠商事が果たすべき「使命」である。

伊藤忠商事の物語を振り返り、私にとって最も印象的だったのは、彼らの「商人魂」である。商人魂とは一体何か。その精神を形作っているのは、恐らく伊藤忠商事の先見性、誠実、多様性、情熱そしてチャレンジ精神であろう。そしてこれはまさしく私たち中国企業に不足しているものではないだろうか。グローバル化の今日において長きに渡り発展していくのであれば、スローガンや理念以外に、着実な実践が必要であろう。



顧客の快適さの真の実現

対外経済貿易大学学生代表

見学日時：2016年5月30日（月） 10:00-13:30

見学場所：株式会社みずほ銀行

見学概要

5月30日午前、小雨の中、「走近日企・感受日本」訪日交流団一行はみずほ銀行を訪れ、約3時間におよぶ見学を行った。支店、貸金庫、ディーリングルームなどの見学および若いスタッフとの交流を通して、私たちは日本の銀行の運営システムや組織構造について基本的な理解を得た他、みずほ銀行のこれまでの歩みや中国における発展状況について比較的明確な認識を得ることができた。

まず初めに、みずほ銀行の中国営業推進部の廣瀬俊部長から、みずほ銀行の概況についての紹介と、同銀行における中国業務の展開状況についての重点的な説明があった。みずほ銀行は日本の三大銀行の中の一行として、中国の金融市場の発展や対外政策の変化などに対して鋭い感受性を有しており、常に中国業務開拓の最前線にいる。

その後、私たちはみずほ銀行の支店を見学した。そこでは顧客により快適で、高いプライバシー性を持つサービスを提供するための、銀行の90%の業務をカバーするATM機や大小様々な金額の紙幣や硬貨などの自由な両替が可能な両替機、最新の伝票作成機、防弾ガラスの無い窓口、待合中の顧客へ自発的に情報提供・会話ひいては抽選サービスを提供する知能ロボット「Pepper」など・・・卓越した顧客体験を提供するためのみずほ銀行の努力が至るところで垣間見られた。また、支店の3階には顧客へ財産管理サービスを提供するための証券・信託コーナーが単独で設置され、プライバシーが守られたマンツーマンでのコンサルティングサービスを保障する6つのVIPコンサルティングルームや極めて優れたセキュリティシステムを備えた貸金庫など、こうした様々な役割が協調して機能することで、顧客への万全・便利な金融サービスの提供につなげている。

次いで、みずほ銀行のディーリングルームを見学した後、私たちはいよいよ昼食会に参加となった。昼食会では、みずほフィナンシャルグループの菅野暁執行役専務と中日友好協会の朱丹副秘書長から総括を頂いた他、私たち訪日団の学生との交流が行われた。また、みずほ銀行の各部門の中国語に精通した若い中核スタッフも昼食会に参加し、みずほ銀行での業務についての紹介の他、私たちのあらゆる疑問にも回答頂いた。3時間におよぶ見学は、昼食会の楽しい雰囲気の中で幕を閉じた。

知っていますか？

みずほ銀行には3つの「唯一」がある。これは同銀行の中国業務における3つの「唯一」でもある。

まず、組織構造において、中国営業推進部という中国の国名を冠した専門の部門および事業部を設置している。他の日本の金融機関には、こうした対中国業務に特化した部門配置はなく、ほとんどが「アジア部」、「グローバル部」などの部門の傘下に中国室や中国課が配置されている程度である。

二つ目に、1979年に始まった中国向けの金融研修コースである。この活動は中国の政府機関および企業や銀行において関連の金融業務や融資業務に従事している幹部スタッフを対象に日本での研修を行うもので、これまで毎年継続されている。みずほ銀行の後、その他の日本の銀行や金融機関も同様の活動を始めたが、1979年から現在まで37年間中断なく継続しているのは、みずほ銀行のみである。

最後に、対中国業務におけるアドバイザー業務が銀行内部で行われている。こうした業務は通常、弁護士事務所、会計士事務所、専門のコンサルタント会社や研究所などのコンサルティング機関が行うものだが、何故みずほ銀行で

はアドバイザリー業務を銀行内部における業務範囲に組み入れているのか？それは、銀行における顧客との業務展開は、長期間の相互信頼関係の上に成り立つものだからである。もしこうした業務を銀行傘下のコンサルティング子会社などにアウトソーシングした場合、子会社は自然と自身の利益を求めため、顧客の利益を最優先にはせず、有料サービスにより利益を確保しようとしがちである。みずほフィナンシャルグループは、金融機関としての信用を最も重視しており、その経営理念は顧客第一の堅持である。そのためみずほ銀行は、銀行内部においてその専門知識や鋭い視点により顧客へのサービスを行っているのである。

感想

今回の活動により間近で日本の先進的企業、みずほ銀行への理解を深めることができたことは、私たちの今後の学習や仕事に対して大きな啓発や寄与をもたらすものである。みずほ銀行は日本3メガバンクの一つとして、常に顧客の利益を最優先し、顧客への快適で便利なサービス体験の提供に尽力している。そしてグローバル化の今日、みずほ銀行の中国への重視度合は日増しに高まり、「中国に根差した」高効率でハイレベルな総合的マーケティング体制や「持続可能な発展の実現のため社会に貢献する」という環境理念であれ、または中国の「人材発展戦略」に寄与する奨励基金であれ、いずれもみずほの「いかなる時代にあっても変わることのない価値を創造し、お客さま、経済・社会に豊かな実りを提供する、かけがえのない存在であり続ける」という企業文化と価値への追求を反映している。いかなる企業においても、人を引き付けるスローガンを作ること自体は難しくはなく、真に難しいのは、本当の意味で全スタッフが納得する企業理念を創造し、さらにそれを実際の業務のあらゆる面において具現化することであり、これこそ企業が発展を続ける上での精神力となるのである。今回の訪問と学習を通じて、私たちは世界の一流企業の独自の創造性について身を以って体験し、私たちとの違いや私たちが不足している点についても感じる事ができた。私たちにはまだまだたくさん学ぶべき点があり、この点にもまさに、私たちが交流を深めていくことの意義が存在している。



(みずほフィナンシャルグループ菅野暁執行役専務のあいさつの様子)



(対外経済貿易大学の学生とみずほ銀行のスタッフの交流の様子)

学問の独立 国民の模範

清華大学学生代表

見学日時：2016年5月30日（月） 16:00-21:00

見学場所：早稲田大学

見学概要

早稲田大学は1882年に創設され、創立者は明治維新時代の元老の一人である元内閣総理大臣の大隈重信である。早稲田大学は「学問の独立」、「学問の活用」および「模範国民の造就」を教旨としている。2015年にイギリスQS社が発表した世界大学ランキングでは、早稲田大学は世界で212位、アジアで39位、日本で9位(私立大学では1位)となっている。早稲田大学には複数のキャンパスがあり、私たちは今回そのメインキャンパスである早稲田キャンパス(旧名称:西早稲田キャンパス)を訪れた。

私たちはまず白木三秀教授が主催の日中学生討論会へ参加をした。中日両国の学生が自由に4～6人のグループとなり、日本語または英語で交流をしながら共に興味のある話題について討論をした。討論会のテーマは二つ、一つめは私たちの将来のキャリア計画および将来のキャリアのために私たちが現在行っている準備について、二つめは私たちが近頃読んだ面白い書籍についてである。これらの話題について、まず20分間の自由討論をし、その後各グループの代表者が皆の前で討論結果のプレゼンテーションを15分間行った。



中国人学生のプレゼンテーションの様子

討論会終了後、学生や教員全員が懇親会へ参加し、皆はリラックスした楽しい雰囲気の中、さらに交流を図った。



にぎやかな懇親会

知っていますか？

問：早稲田大学はこれまで何名の歴代内閣総理大臣を輩出しているのか？

答：石橋湛山、竹下登、海部俊樹、森喜朗、小渕恵三、福田康夫そして野田佳彦の7名で、第二次世界大戦後において最も多くの内閣総理大臣を輩出している大学である。また早稲田大学は、ソニーの創業者井深大、サムスンの創業者李秉喆、カシオの創業者樫尾忠雄など多くの世界的企業のトップも輩出している。

問：早稲田大学は中国の近代化にどのような貢献をしてきたのか？

答：早稲田大学は日本で最も多くの留学生を受け入れている大学で、自大学の全学生を海外へ派遣するという目標も持っている。早稲田大学と中国との交流の歴史は長く、1905年に清国留学生部を設立したのを皮切りに、早稲田大学は中国の近代化のための人材育成の面で大きな役割を果たしてきた。初期の中国共産党のリーダーである陳独秀、李大釗などはいずれも早稲田大学の卒業生である。

感想

京都大学での交流とは異なり、早稲田大学では4～6人のグループで交流が行われたため、学生同士の交流はより活発で緊密になり、皆は他人の話に十分に耳を傾けつつ、自分の意見を発表する必要があった。今回の交流における話題も学術的な問題から学生の生活面に変わり、私たちは日本の学生の日常生活や学習などの習慣についてより深い理解をすることができた。また、プレゼンテーションの時間が充分にあったため、大多数のグループは2人の代表者によりプレゼンテーションをし、私自身もグループを代表して私たちのキャリア計画についての考えを発表することができた。これは、総括能力や表現能力、またそれ以上に私自身の度胸を鍛えることができた非常に得難い機会であった。

早稲田大学は私立大学であるが、非常に高い教育水準に達しており、日本や世界に多くの人材を送り込んでいる。対して中国の一部の公立大学はすでに比較的高い水準に達し、国際的にも一定の評価を得ているが、私立大学の発展については楽観できない状況にある。そのため中国は私立大学への支援を強化し、高等教育の活力を呼び覚ましていかなければならないと思う。

ホテルニューオータニの環境哲学

北京工業大学学生代表

見学日時：2016年5月31日（火） 09:30-11:30

見学場所：ホテルニューオータニ東京



見学概要

今日は私たちの今回の訪日の最終日で、ここ数日宿泊した東京の最高級ホテルの一つであるホテルニューオータニを見学した。私たちは同ホテルの生態環境について見学を行い、その環境哲学を学んだ。

1. エネルギーの再利用

ホテルニューオータニは環境保全と循環再利用の理念に則り、ホテル全体の運営とエネルギーの再利用を行っている。また、そのエネルギーの再利用は以下の三つの面から行われている。

まずは独自の小型発電施設である。ホテルニューオータニでは、地下に発電施設を建設することで、年間使用電力の三分の一を賄っている。この三分の一の電力とはどんな概念か？例を挙げると、今年の4月、ホテルニューオータニの使用電力は545000キロワットで、金額にして7200万円相当になる。一ヶ月の電力消費がこれほど多いのであるから、一年間の消費電力にかかる金額は言わずもがなである。しかし、ホテル地下の小型発電施設により多額の電気料金の節約につながっている。

次に廃水の再利用である。廃水は主に厨房排水で、排出された廃水は浄化装置による沈殿と殺菌の段階を経て再利用可能な中水となる。（一方水道水の浄化装置には、醤油の醸造や酒などに使われる木材で造られた受水槽が使用され、この木材には殺菌作用がある。）ホテルニューオータニでは毎日約1000トンの厨房排水が浄化処理され、トイレの洗浄水の他、樹木や庭園の灌水用としても再利用されるなど、水の節約の役割を完全に果たしている。



最後に生ゴミの再利用である。ホテルニューオータニでは毎日約 5000kg の生ゴミが排出されるが、プラントでの処理を通じて 3200kg から 4000kg の粉末状の堆肥が作られ、ローズガーデンでの施肥に使われる。またそのローズガーデンは大きくまた熱がこもりやすい宴会場の屋上に置かれることで、宴会場内の温度を下げる役割を果たしている。

2. 生態環境の設計-ローズガーデン

ホテルニューオータニには美しいローズガーデンがあり、これはイギリスの著名なフラワーコーディネーターであるケネス・ターナー氏がデザインしたものである。このローズガーデンは結婚式場として利用されている。

屋上緑化は都市の緑化面積を増やし、日々悪化する人類の生存環境空間を改善するものである。そして都市の高層ビルの林立による悪影響を改善し、数多のアスファルト舗装の道路に取って代わられた自然の土地や植物の現状を改善し、また過度の森林伐採、そして様々な排気ガス汚染によるヒートアイランド現象や砂嵐などの人類への危害を改善するもので、人類の緑化空間の開拓、田園都市の構築、人々の居住環境の改善、生活品質の向上、および都市環境の美化や生態影響の改善に重要な意義を有している。ホテルニューオータニは、ややもすれば人の温かみを感じる事が難しいこの東京において、すべてのゲストに清らかで誠実な温かみを感じていただけるよう、今日も最善を尽くしている。



知っていますか？

問:ホテルニューオータニとその他のホテルにはどのような違いがあるのか？なぜホテルニューオータニではゲストに最も快適なサービスの提供が可能なのか？

答:【室内環境】ホテルニューオータニには、ゲストに快適な室内環境を提供するためのAEMS(空調システム)がある。AEMSはゲストそれぞれの好みに合わせて室内の温度や湿度などの設定が可能である。さらにこのシステムは「ザ・メイン」のエネルギー消費の22.7%、CO₂排出量の28%を削減することができる。

【視覚的体験】ホテルニューオータニには、ゲストが昼夜問わず抜群の眺望を楽しめるよう全面ガラス張りの窓(フルハイトウインドウ)が設置されている。さらにこの窓は外部の熱や紫外線を50%カットすることができる。

【味覚の享受】ホテルニューオータニには、ゲスト用に中国料理・西洋料理・ビュッフェなどあらゆる種類のレストランが揃い、また本格的な日本料理を楽しみたいゲストへは日本料理のレストランも備えている。ホテルニューオータニの美食で新たな一日を始めましょう！

【安全保証】ホテルニューオータニの「ザ・メイン」をはじめ、「ガーデンタワー」「ガーデンコート」「新紀尾井町ビル」のいずれも耐震性強化設計がされており、1995年の阪神大震災規模の地震にも耐えられる設計になっている。

問:ホテル創設の由来は？

答:ホテルニューオータニの歴史は、1964年東京オリンピックを2年後に控えた1962年に始まる。当時日本政府は外国人客の来訪30000人という目標達成のため、大規模な受け入れ施設建設を財界に打診したところ、大谷米太郎、ホテルニューオータニの創業者がホテル建設を受諾し、皇居近くの紀尾井町に最高級のホテルを建設し、日本の旅行業の発展に貢献した。

感想

今日のホテルニューオータニの生態環境見学を通じて、私は環境への優しさの重要性をより強く認識した。環境への保全意識は、企業が担う社会的責任であり、非常に敬服すべきものである。中国国内の一部の企業でも同様の動きがあるが、まだ普及しきれておらず、同時にホテル自身がゴミの再利用や資源の自己生産や自己利用をしているわけではなく、外部の専門の企業がゴミや廃水などの処理を代行している。私は今後近い将来、中国でも各ホテルがこうした廃棄物の再利用システムを採用するものと信じている。

数十年の発展を経て、現在のホテルニューオータニはすでにあらゆる面で円熟した日本の最高級ホテルとなっており、絶えず施設やサービスを向上することでゲストの高い要求を満たし、さらに誇るべき遺産や伝統を確立また強化している。そしてこの過程にはスタッフの苦労やたゆまぬ努力がある。次回もまた私たちに素晴らしい思い出を残してくれたこの場所を訪れたいと思う。



訪日団の全員がホテルの日本庭園内で記念撮影

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第18回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日 付：5月24日（火）1日目

大学名： 清華大学

氏 名： 陳文鋸

5月24日の正午、私たち一行は首都空港に集合し、搭乗手続きやセキュリティチェックの後搭乗した。私たちが今回乗る飛行機は、今回の訪日活動を支援する中国日本商会のメンバーである全日空のものであったため、私たちは空港にて全日空のスタッフのもてなしを受け、さらに同社からアニメ風のフライトアテンダントのマグネットステッカーを頂いた。

搭乗を済ませ、3時間余りのフライトとなった。その中の大部分は海の上での飛行だったが、関西空港への着陸が近づき飛行機が降下を始めた際、私たちは窓から海面上の波を見ることができた。また関西空港は海を埋め立てて造られた空港とのことである。私たちは着陸後、初めて陸地から日本を見た。空はとても青く、雲は低く、潮の香りが混じったそよ風が吹いていた。これが私の日本に対する最初の印象である。

空港で簡単に食事を済ませた後、私たちはバスで京都に向かった。道程は1時間少々で、この間日本の発達した交通網を体験することができた。その後京都のホテルに着き荷物を降ろした後、私たちはすぐにまた外出し京都の夜景を楽しんだ。京都は長い歴史のある古都であることから、都市の建築物も皆低く、街路も比較的狭い。夜の京都はとても静かで、道端にはところどころにある居酒屋、24時間営業のコンビニそして様々な自動販売機がある程度で、清潔、整然、古風、静謐というのが私の京都に対する印象である。

そしてホテルでは私たちへ浴衣が準備されていた。それを身に付け可愛い写真を撮った後、明日の討論会について少し準備をしてから眠りについた。

おやすみなさい、京都。

日 付：5月24日（火）1日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 史蕊

朝早くに起きて訪日団の制服に着替え、荷物を整えて待ちに待った今回の旅へ出発となった。当初私は自分がとても早くに出発したと思っていたが、先生方や一部の団員が早くから空港に到着していた。これには私は、先生方や日本側のスタッフの皆さんの情熱や真面目さを感じ、さらに私自身も訪日団の一員としての責任感をより意識し、絶対に個人的な理由で皆に迷惑をかけてはならないと感じた。

今回初めて日本を訪れ、多くの点で衝撃を受けた。1) 空港やレストランのスタッフはいずれも笑顔で私たちへ挨拶をしてくれ、これには私も笑顔で返さないと失礼になると感じた。私は彼らのこうした互いを尊重し、互いにポジティブさを与え合う生活習慣に感動した。2) トイレの設計が合理的で非常に清潔である。まず、日本のトイレには洗浄、加熱など沢山の機能があり、人に優しく、とても高級である。しかも日本には中国のようなごみ箱はなく、ごみを吸い取る機械がついていてとても清潔である。彼らのこうしたきめ細かさや思いやりには感服させられた。他人を思いやるこうした設計は、使用する人を心地良くする。

1人の外国人として日本を訪れ、正直なところ常に緊張している。なぜなら自分の国を離れた私たちは中国を代表しているのであり、また中国の大学生の振る舞いを示しているからである。だから自分の振る舞いが日本人的におかしいかどうかを常に気に掛けている。先生が言うように、こうした緊張感実は良いものであり、緊張感自分を戒め、

また自分を厳しく律することができる。こうした緊張感を通じて、私たちもより礼儀正しく、またより優れた自分に変わっていくのである。

日 付： 5月24日（火） 1日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 黄静

初日のスケジュールはほとんど飛行機とバスの中で終了したため、日本という国に対してはまだ踏み込んだ理解をしていないが、それでもこの数時間において、私は日本のサービスにおける誠実、思いやり、細やかといった接客のあり方を感じることができた。

飛行機内では、客室乗務員は常に穏やかな声と笑顔で乗客の様々な要望に応え、空港内のレストランでは、サービススタッフは中国語で料理の紹介をするなど、その行き届いた接客態度はとても心地良いものであった。またビュッフェエリアには子供用のスペースもあるなど、とても微笑ましく思うと同時に、こうした全てのゲストを思いやるサービス精神には感慨を覚えた。なぜなら中国では、比較的高級なビュッフェでもこうした光景は見られないからである。そして私たちの乗るバスがホテルを離れる際、ホテルのマネージャーは私たちを見送ってくれ、私が彼に手を振ると、彼もすぐ笑顔で応えてくれたのである。これにはとても感動した。

明日は島津製作所への訪問と京都大学での学生との交流である。どのような印象深いことが待っているのだろうか。心から楽しみにしている！

日 付： 5月24日（火） 1日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 袁偉傑

昨夜は興奮のあまり中々寝付けなかった私だが、今夜はすでに京都の新・都ホテルに泊まっている。

今日は朝早くに起き、準備を整え11時に先輩とともにT3ターミナルビルに到着した。そして全ての搭乗手続きを済ませ、複雑な気持ちで飛行機に乗った。初めての飛行機で未知の国に向かう、憧れと緊張が入り混じり、自分が日本に溶け込みこの国の風土と人情を体験し、互いの国の文化的違いを感じたいと思いながらも、言葉の壁がそれを許してくれないのではないかという不安も抱いていた。

その後、飛行機は日本の上空に到達したが、上空から見ただけで日本の違いが感じられた。ここでの同行の許さんの、上空から見ると北京はビルの模型のようだが、日本を上空から見ると緑化整備された建築模型のようだという言葉は印象的だった。

飛行機を降りた私は、すぐに細かな分類がされているゴミ箱を見かけた。当初私はこうした分類はインターネット上で大げさに言われているだけだと思っていて、日本では本当にこうした分類がされていたとは知らなかった。

その後私たちは空港内でのビュッフェディナーとなった。また私たちの世話をしてくれたのは中国籍の方だったので、とても親しみが感じられたが、中国籍のサービススタッフであれ日本人のサービススタッフであれ、彼らの接客態度は完璧で、彼らの変わらぬ笑顔は私の異国の地における心の不安をかき消してくれた。

そしてバスで私が今滞在している新・都ホテルにやってきた。明日の島津製作所と京都大学への訪問に胸を躍らせている私は早く寝ることにした。しっかり英気を養い明日を迎えたいと思う。

日 付： 5月24日（火） 1日目

大学名： 中央民族大学

氏 名： 底家銘

今日の北京は見渡す限り雲が無く、これには私の切迫した気持ちにさらに灯がともった。私たちは2番目に空港へ到着した。以前私は訪日団の制服の色が派手すぎると愚痴をこぼしたことがあるが、空港に着き黒山の人だかりの光景を見て、はじめて先生方の気配りを理解することができた。この色は非常に見分けが付きやすく、グループからはぐれにくいのである。

私は生まれて初めての飛行機だったため、搭乗手順が分からなかったが、随行の先生のご指導や優しい空港スタッフの案内で無事セキュリティチェックを通過した。

そして搭乗時刻となり私たちは続々と機内へ搭乗した。私にとってはすべてが初めてであったため、私は子供の様にあちこち見渡した。私は小さい頃、時折車酔いをしていたため、ここでも楽しさを感じると同時に、飛行機内で酔うのではないかと心配していた。そして飛行機がゆっくりと滑走路に向かい、そして加速の後離陸した。飛行機が上昇する時機体が激しく揺れ、上空に着くまでの間に多少の上下運動があり、私は興奮した気持ちでこれらを体感した。幸いにも酔うことはなく、仲間たちとの楽しい会話の中で3時間が経過していった。

そして私たちは大阪の関西国際空港に到着した。皆は機内で食事をしていたものの、多少の疲れと空腹を感じていた。そして私たちは関西空港内のホテルで豪華なディナーを楽しんだ。私はこれが初めての日本料理で、焼き魚とステーキは印象的であった。それから抹茶のデザートである。日本の抹茶はやはり評判通りの美味しさであった。そして食事の後、私たちはすぐに京都へ向けて出発し、新・都ホテルに到着した。新・都ホテルはとてもきれいで印象深かった。そしてお風呂に入った後、疲れた私はすぐにベッドに横たわり眠りについた。

日 付： 5月24日（火） 1日目

大学名： 北京工業大学

氏 名： 曾 檬

幼いころから憧れと思いを寄せていた国への旅、8、9歳の頃から現在の19歳までずいぶんと時間が掛かったが、ついに訪れることができる。だが飛行機がゆっくり降下し日本への着陸が近づくほど、自分の中での現実味が無くなっていった。そして大海原と、行き交う異国の人々、看板のネオンサイン上の日本語などを目にして、やっと自分は日本に来たのだと実感することができた。今、目の前に日本という国がある。好きな人、好きな音楽、好きな文化、好きなもののすべて、それらのほとんどがこの国から来ている。そして今この時、それらは長年会っていなかった親友のごとく私に手招きをし、両腕を広げて私に抱擁をしてくれた気がした。

初めて訪れた日本での私の印象は、①伝統、②繊細さ、③節約といった単語で総括できる。伝統について言えば、滞在した京都のホテルでは、客室内に仏教やキリスト教および現地の伝統文化を紹介する書籍が備え付けられ、善と文化を発信している。仮に人々が皆こうした蘊蓄と善の心を持ち、伝統を重んじれば、国は必ず栄え、家庭は必ず睦まじくなる。繊細さについて言えば、備え付けの物品には足りないものは全くなく、すべてが揃っていて、しかもきれいで整然としていて非常に心地が良い。そのためこうした環境においては、何をするにも心を乱すことはなく、一心不乱に手を抜かず、思いを静めて物事を行うことができ、それが次の繊細さをもたらし、それらが繰り返され良い循環を形成している。節約について言えば、仏道では人への良い報いには限りがあるとしているため、ここでは至る所の物品において資源の節約を求めている。節約も本来美德であり、現在のこうした時代にあっては尚のこと提唱すべきである。

今日の感想はおよそこのような感じである。

以上。

日 付：5月25日（水）2日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 于孟鑫

2日目から私たちの企業訪問の活動が始まった。島津製作所は日本における代表的な百年企業として、今回の私の日本企業学習の先陣を切った。スタッフの紹介を聞いた私は、まず二つの感想を持った。まず、企業理念は企業の進むべき方向であり、同社を環境の保護や地球の保護に導くものである。だからこそ同社は環境保護をテーマとし、これまで社会の潮流に順応、ひいてはその潮流をリードしてきたのである。次に、挑戦と革新は企業あるいは人類が進歩をするための方法であり、私たちは絶えず挑戦を受け入れ、革新をしていってこそ進歩することができるのである。企業の角度から見ると、初代の島津源蔵の時代から発明は同社の初心であった。もう一つは製品への認識である。快適で使う人に優しい製品だけが消費者から好まれ、同社の医療計器のサイズ、色、ひいてはシールに至るまで、いずれも消費者への配慮を感じることができる。

また京都大学は古都の京都にあるため、きつと歴史的な重みや昔ながらの厳しさがあるのだろうと私は考えていたのだが、実際に足を踏み入れて、この日本ひいては世界でもトップクラスの大学の自由な精神に私は心服させられた。校門の看板は学生たちの心の声をありのまま表現しており、キャンパス内では「自由の学風は京大の憲法である」というキャッチフレーズが掲げられていた。これこそ京都大学の自由な精神である。正にこうした自由な精神により、京都大学の教員や学生たちは一つの分野だけに縛られず、未知の領域へと挑戦し、革新を続けることができるのだと私は感じた。その他心から敬服したのは、科学や知識、研究への研鑽ぶりであり、ここでは皆が落ち着いて、慌てず、目の利を求めることなく、純粋に研究に打ち込んでいる。これは私たち現代の若者に最も欠けている精神である。

日 付：5月25日（水）2日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 江涵

一晩の休息を経た私たちは、元気一杯に今日の企業訪問（島津製作所）と大学での交流活動（京都大学）に向かった。

午前の島津製作所では、私はこの創業141周年を迎えながらも、ますます生命力に満ちていく企業の創業の歴史と現状そして中国における事業展開の状況について理解することができた。具体的には紹介ビデオやその他の資料によって、島津製作所のビジョンまたは企業理念は科学技術で社会に貢献することであると知り、特に印象深かったのは、島津製作所が子供にも負けない好奇心と想像力で新たな技術を探求している点。また同社の医療設備の見学の際に分かった、居住区に住む子供の多さを考え医療器械へ色とりどりのシールを貼るなどの、同社の患者に対する思いやりと気配り。さらに女性の乳がん検査設備にはピンク色や快適な素材を使い女性に快適さと気軽さを与え、またこれらの設備は充電可能で移動式または機能集約型で、調節可能という点で、これらは災害救助などの緊急時に特に適しており、こうした常に利用する立場の人を思いやる精神と実際の企業としての行動にはとても感銘を受けた。

そして京都大学の学生との交流では、「自由な学風、革新の精神」とは何かを身を以って感じるなど、世界の一流大学としての京都大学独特の気質を感じることができた。さらにグループ内討論の際は、彼らと貿易協定等の問題について意見を交わし、互いに知らない中日両国の状況について理解を深め、さらに友情を育むこともできた。

日 付：5月25日（水）2日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 鄒璐璐

日本での2日目は、とても慌ただしい一日であった。

朝、朝食を済ませると私たちはすぐに島津製作所への訪問に向かった。そしてこの140年あまりの歴史を持つ企業において、私は科学技術のすごさと発展スピードの速さを体感した。「科学技術で社会に貢献する」を目標とし、人類社会に貢献する製品を次々に産み出している他、同社はすでにグローバルスタンダード企業となっている。同社の田中耕一氏は様々な困難を乗り越えノーベル賞を受賞するなど、こうしたチャレンジ精神は同社の発展を今日まで支え続けている。同社が持つこうした精神は、私たちが学びそして再認識すべきものである。

お昼は日本の懐石料理に舌鼓を打ち、日本の食文化についてさらに理解を深め、庭園の優雅な環境を堪能した後、私たちは日本の最高学府の一つである京都大学を訪れた。京都大学の学生との交流を通じて、私たちは教育問題を深く考え、中日間の教育の違いについて考えさせられると同時に、長所を学び短所を補うことの重要性を認識し始めた。また当然ながら今回の交流では日本の教育制度と現状について理解を深めた他、自分たちの国における教育の問題点がより明確になり、今後そうした問題の解決方法を探ろうという気持ちになったのである。

その日の夜、京都大学の皆さんは私たちのために懇親会を催してくれた。懇親会の席上、私たちは数人の日本人学生と歓談し、友情を育むことができた。私たちは歓談を通じて互いを知ると同時に自分自身を高めることができた。交友範囲が広がっただけでなく、自分の思考や心も豊かになった。

今日は沢山の収穫があった。明日がまた楽しみである。

日 付： 5月25日（水） 2日目

大学名： 北京工業大学

氏 名： 楊中清

初日は午後と夕方の日本を体験できたが、今日は自分の足で日中の日本を探索することになる。

朝はホテルのビュッフェの美味しい食べ物に誘われて目が覚めた。そして食事の際、私は改めて日本人や外国人の、率先して食事のルールを守るという素養の高さを感じた。彼らが自然と一列に並んで朝食を取っている様子は中国のそれとは全く異なっていて、印象深くまた改めて色々と考えさせられた。

朝食の後、私たちは島津製作所での見学となった。その際、島津製作所側からきれいなハガキを記念として頂いたが、このハガキは彼らの熱意や真摯な態度だけでなく、島津製作所の輝かしい功績も表していた。島津源蔵氏は本当に偉大な企業家であり発明家であり、また開拓者である。祖国の未来のための科学研究における彼の気力や決意に私は心から敬服した。無から有へのプロセスにおいて彼はいかなる困難をも克服し、ついに実験室での科学研究を大きく推進する精密実験計器を開発したのである。これはどれほどの常人では考えられない根気であろうか。島津源蔵氏だけでなく、その息子である二代目島津源蔵氏も島津製作所の100年以上の安泰のために確実な基礎を構築した。小学校しか出ていないにもかかわらず、彼は探求を好み、進んで新たな物事を開拓し、数百件の発明をしたのである。これはなんと偉大な功績であろうか。そして彼の成功は、私から見て、その一部分は彼自身が目と心の両方で生活に注目したこと起因している。なぜなら彼の発明の多くは生活における些細な現象で、一般の人々は気が付かない現象と密接に関わっているからである。

午後、私たちは世界的にも有名な京都大学へやってきた。そこではまず京都大学の韓教授と家本教授からの歓迎のあいさつと京都大学の紹介があり、私はその紹介を通じて京都大学への理解を深めることができた。

続いてグループ討論のコーナーとなり、私たちは複数のグループに分かれて討論を始めた。私たちのグループのテーマはエネルギー問題であった。討論の際、グループ内の京都大学の学生はとても意欲的に私たちと交流をし、私たちはすぐに打ち解けることができた。そして最後に互いの連絡先やEメールを交換した。私たちはきっと良い友人になれるだろう。また討論においては、問題に対する彼らの考察や解決方法は私にとって大きな啓発となった。彼らは私たちがよく使う文字の手段だけでなく、さらに図表も上手に運用し、モデルを描いて問題を解決するのであった。これは私に新たな道筋を教えてくれた。

夜になり、私たちは京都大学での食事とさらに懇親会に参加した。その席上では新たに多くの日本人学生と知り合

うことができ、とても嬉しかった。そして全ての活動を終え私たちが京都大学を離れる時になり、とても名残惜しい気持ちになった。また会いましょう、皆さん。

今日は本当にたくさんの魅力が詰まった一日であった。皆さんに感謝します！

日 付： 5月26日（木） 3日目

大学名： 清華大学

氏 名： 陳文鋸

今日のスケジュールは主に「感受日本」で、日本の風土と人情、自然景観そして温泉の体験であった。朝、私たちは車で嵐山の見学に向かった。嵐山には周恩来総理の記念碑があり、それには当時周総理が嵐山を訪れた際に詠んだ詩が刻まれている。私たちの今回の訪日も中日友好の懸け橋としての役割があり、この詩碑を目の前に私は、中日両国間には文化的な共通認識や同じ儒教の伝統があるのだから、友好的な交流を通じた共同発展を模索すべきではないかと思った。その後私たちは金閣寺を見学した。金閣寺ではいくつか御守りを買ひ、そして日本の寺院文化を体験した。御守りは中国でいうところの平安符に似ている。私は、御守りに家族の健康と自身の学業成就、そして円満な交友関係への願いを捧げた。

午後私たちは日本の新幹線を体験し、京都から一路三島に向かった。新幹線は中国の高速鉄道と良く似ていた。私は高速鉄道の恩恵を受けた沿海都市の一つである温州の出身のため、新幹線に対しては一種の親しい共感を覚えた。それでも一つ変わっていると思ったのは、日本の新幹線にはセキュリティチェックを設けておらず、これにはどのように運行における安全を確保しているのかとても不思議であった。

そして夜になりホテルに到着したが、私にとって最も印象深い一晩であった。眼前の玉簾神社を見ながら夜風に吹かれ、そして滝の流れる音を聴きながら露天風呂に浸かった時の私は、全身からリラックスすることができた。

こうした一晩を体験できたことに感謝します。ありがとう！

日 付： 5月26日（木） 3日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 倪楠

今日私たちは京都から箱根へ向かうため、朝早くに起きて荷物を整えた。そして朝食を済ませてから今日のスケジュールが始まった。

午前私たちはまず嵐山に向かった。大堰川の川岸に沿って山を走っていくと、道中の一方では色とりどりの草花で飾られたとてもきれいなお店、もう一方では水鳥や鯉などが生息する大堰川を見ることができた。素晴らしい自然環境は人を心地良くするものであり、私は修学旅行に来ているような気がした。しばらくして周恩来記念碑にやってきた私たちは、周総理が嵐山を訪れた際に詠んだ「雨中嵐山」を記念碑の前で朗読し、記念撮影をし、中日友好に貢献された人々へ思いを馳せた。その後、私たちは嵐山で抹茶アイスクリームを食べたが、抹茶の香りとアイスクリームの冷たさはとても爽快であった。暫くの休憩の後、私たちは金閣寺へ向かった。

京都は日本でも数百年の歴史を持つ古都であり、文化的雰囲気の色濃く残っており、神社仏閣も多く、金閣寺はその中でも最も有名である。ここには大勢の観光客の他、見学に訪れる多くの日本の小中高生もいて、人の多さは私に中国の国慶節連休を思い起こさせた。寺院内で私たちは、美しい絵巻のような鏡湖池に映し出された金色に輝く金閣寺を目の当たりにした。その他、ここでは京都のお土産や家族そして友人への御守りを購入した。

午後、私たちは新幹線で京都から三島に向けて出発した。はじめて日本の新幹線を体験し、私は内心興奮していた。車両の走行は安定していて、大きな揺れもほとんどなく、車両内はきれいで広く、手足を伸ばすのに十分なスペースがあった。これは個人的に印象深い点であった。

新幹線を降りた後、私たちは恩賜箱根公園から芦ノ湖の美景を堪能し、その後この日宿泊する天成園に到着した。そして会席料理を体験し、懇親会を催し、日本の温泉を体験して楽しい一日が終わった。

日 付： 5月26日（木） 3日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 黄静

今日のスケジュールはとても気楽で楽しいものであった。嵐山の周恩来記念碑を見学した後、私たちは金閣寺を訪れた。その後私たちは三島に向かう新幹線「ひかり」号に乗り、今回の訪日で最も楽しみにしていた活動の一つである温泉体験に向かうことになった。京都の美食と美景は名残惜しく、持ち帰れない美景は脳裏に刻み、持ち帰った美食は私たちの家族や友人のためにとっておくことにした。たくさんの思い出と共に、私たちはまた新たな旅を始めた。

箱根の山道は曲がりくねっていた。山間の優美な景色を眺め、そして運転手さんの運転技術に驚きながら、芦ノ湖の雄大な景色を堪能した後、私たちは天成園ホテルに到着した。

日本の温泉は中国の温泉とは大きく異なり、外で身体を洗ってから温泉に浸かる。露天風呂の中で暖かな水流を感じながら、空に広がる星々を堪能し、森の清らかな空気を吸うと、日本の生きとし生けるものにさらに一歩近づけた思いがした。

日 付： 5月26日（木） 3日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 許禄野

今日は訪日の3日目で、今回の訪問で最もリラックスした一日であった。まず嵐山を訪れ、周恩来記念碑の前で熊璋さんによる周恩来総理が詠んだ「雨中嵐山」の朗読を聞いていると、総理の当時歩かれた道を歩いたことへの感激がこみ上げてきた。周総理と北京第二外国語学院とは切れない縁がある、というのは、当時周総理の意向の下で創設されたからである。そのため今日の周恩来記念碑への訪問は、北京第二外国語学院の学生にとっては特に感激するものであった。また嵐山の景色も趣のあるもので、川底が見えるほど透き通っている川の水のせせらぎ、そして周囲には植物が鬱蒼と茂っている。この嵐山からは日本における植物のカバー率の高さがうかがえる。私はちょっと変わった比喩表現を思いついた。上空から見ると北京はビルの模型のようだが、日本を上空から見ると緑化整備された建築模型のようだと思った。

午後は楽しみにしていた新幹線に乗った。さすがに評判通りで、京都から三島までわずか1時間59分で到着した。日本の新幹線はとても静かで、また中国の高速鉄道と比べても車内はきれいで広く、座席もより座り心地が良かった。その後芦ノ湖を遊覧したが本当に景色が良かった。少し残念だったのはこの日は少し曇りの天気だったため、逆さ富士を目にすることができなかったことである。ただそれでも山々は独特の風格があり、それらの山々が湖を囲み、さらにかすかな雲がかかる様子は桃源郷のようであり、また時折鳥が上空を旋回する様子は、「海闊凭魚躍、天高任鳥飛（魚や鳥が自由に動き回れるほどの大自然の限りない広さ）」の感覚を思い起こさせた。ここの静寂はとても素晴らしかった。

夜は会席料理を堪能し、仲間たちの歌やダンスを楽しんだ。皆はとても芸達者で本当にうらやましい。この後は温泉体験で、とても楽しみにしている。

日 付： 5月26日（木） 3日目

大学名： 中央民族大学

氏 名： 鄭縁童

2日間の企業訪問を体験した私たちの今日の主な活動内容は、日本の歴史や文化体験である。朝早くに私たちはホテルから嵐山に向けて出発した。

嵐山への道中、私たちは車窓を隔てながらも自然の息吹を感じることができた。緑の山ときれいな水に囲まれ、人の多い都市部に比べて、世俗から離れたようなこのすべては心地良く、静かな林道から時折鳥の鳴き声が聞こえる様子はとても和やかで落ち着いた雰囲気を醸し出していた。道沿いに山を登り、私たちは周恩来記念碑を見学した。そして雨中嵐山の詩から周恩来総理の両国友好への切なる願いを感じた。そしてこれもまた私たちに今回の訪日の目的をあらためて教えてくれた。ただ見学をするのではなく、中日両国の友好に対して自分自身の貢献をし、この貴重な友情を大切にすることがより重要なのである。

午後、私たちは新幹線で三島へと向かった。三島に到着後、私たちはバスに乗り換え芦ノ湖に向かった。本来恩賜箱根公園からは富士山が見られるのだが、この日はちょうど天候がすぐれず曇っていたため、雄大な富士山の姿を目にすることはできなかった。それでも眺望台から高い山々が芦ノ湖を囲んでいる様子を見て、私たちは大自然の偉大さに感嘆せずにはいられなかった。

夕刻になり私たちは長い山道に沿って湯本温泉の天成園に到着した。ホテルでは会席料理に舌鼓を打ちながら各大学の出し物を観賞した。皆が歌ったり踊ったりする様子からは、数日前とは違い完全に打ち解けていることがわかった。

夕食の後は待ちに待った露天風呂を体験し、一日の疲れを癒した。皆も良く眠れることを願っている。

日 付： 5月26日（木）3日目

大学名： 北京工業大学

氏 名： 楊中清

日本に来てからの毎日はすべてが新しい一日で、毎日様々な収穫があった。今日は目的地に移動するため、私たちは朝早く起きて荷物を整えたが、何の不満も疲れも無かった。なぜなら豪勢な朝食が待っていたからである。

朝食を済ませた私たちは、京都での最後の訪問地である周恩来記念碑と金閣寺へ向かった。周恩来記念碑へ向かう道中、私はあらためて日本の環境の美しさを体感した。地面にはゴミひとつなく、あるのは木の葉、木の枝そして花びらであった。この他、今の時期は日本の学生の修学旅行の時期に当たり、バスの中から路上を歩く学生の集団を見かけた。その彼らは道で見知らぬお年寄りに出くわすと皆会釈をして挨拶をしていたのである。これには私は本当に驚かされ、彼らに対し心から感心した。そして周恩来記念碑に到着しまず印象深かったのは、周囲の緑豊かな山と土手の傍を流れる川の水であった。山は高くはないがとても緑豊かで、川の水はきれいな青緑色で、見ていてとても心地良かった。

周恩来記念碑の前に立った私たちは、周恩来総理の中日友好を末永く続けなければいけないという思いを直に目にした。

記念碑の見学を終えた私たちは山を下り、抹茶アイスクリームを食べ、皆とても嬉しそうだった。

その後、私たちは金閣寺にやってきた。ここは特色ある寺院で、まず通ってきた道に戻ることはなく、入口から入り、出口から出るという二つのゲートがある。次に、金閣寺は社で願掛けができるためここを訪れる人は非常に多く、京都で最も人が集まる場所だと思った。中に足を踏み入れ、私たちはまず金閣寺が湖面に逆さに映る美しい「逆さ金閣」の様子を写真に収めた。そして私は山を登り無事と幸福を祈った。心の中は幸せと希望に満ちていた。

そして時間はあっという間に過ぎて、お昼私たちは日本料理に舌鼓を打ち、その後新幹線に乗るため京都駅にやってきた。駅構内には映画館や様々なショップなどあらゆる設備があり、日本の常に利便性を考えるというモットーを感じることができた。2時間の乗車の後三島に到着した私たちは、まず恩賜箱根公園を訪れた。ここはまるで大自然における天然の空気バーのようで、湿度が高く、空気がとても新鮮で、樹木がたくましく成長していた。またそこから遠く

を眺めると、大自然の恩恵が感じられ、心が広がる思いがした。

夜私たちはホテルに到着し、日本の浴衣に身を包み、温泉を体験した。また皆で出し物を披露し、歌やダンスを心から楽しんだ。日本は本当に魅力に満ちた場所だと思った。

日 付： 5月27日（金） 4日目

大学名： 清華大学

氏 名： 万正一

今日私たちはアサヒビール神奈川工場と伊藤忠商事を見学し、日比谷松本楼で孫中山氏と梅屋庄吉氏との革命にかける友情の故事についてのお話を聞いた。

アサヒビール神奈川工場では、ビールの生産における様々なプロセスを見学し、ホップや大麦といった原料や各プロセスにおける反応装置を目にするなどの普段できない体験をすることができた。特に瓶ビールが箱詰めされるプロセスは、自動化によりとてもスピーディーで、またインパクトがあった。そしてお昼には皆で同社のビールの試飲をしたが、普段お酒をほとんど飲まない私には、ビールの味の違いは判らなかった。

伊藤忠商事の業務は多岐にわたる。同社は日本の五大商社の一社として、2015年度における利益は五大商社のトップであった。同社のコーポレートメッセージは「一人の商人、無数の使命」で、責任感や使命感そして社会や国への利益還元を重視している。同社での晚餐会の席上、私たちは同社のスタッフと様々な交流をした。同社のスタッフの多くは中国語が堪能で、この点からも伊藤忠商事が中国市場を重視していることがうかがえた。そのため彼らとの交流は何の問題もなく、一部の人はネイティブレベルの語学力であった。私たちは日本人の仕事の強度や東京の状況などについて沢山意見を交わし、日本人には仕事が第一で、家庭が第二という考えがあり、しばしば会社で12時間勤務をしていることを知った。それと同時に、多くの日本人は一つの企業で定年まで勤め上げることが多く、また会社がしっかりと研修を行うため、彼らの学生時代の専攻は実際の仕事の内容とさほど関連が無いことも知った。彼らとの交流を通して日本企業に関する多くのことへの理解を深めることができた。

その他私たちは日比谷松本楼を訪れ、梅屋庄吉氏の子孫の方から同氏と孫中山氏との故事についてのお話を聞いた。梅屋氏は精神的にも物質的にも孫中山氏による革命活動を支援し続けた。こうした真摯な友情に私はとても感動した。

日 付： 5月27日（金） 4日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 江涵

皆は名残惜しそうにこの美しく快適な温泉ホテルと別れを告げ、この日の企業訪問と文化視察の活動を始めた。バスが山間の道路を走り、道路の両側は緑の木々で囲まれ、遠くに目をやってもすべてが緑色と、とても心地が良かった。天気の影響で富士山の姿を目にすることはできなかったが、逆に無限の想像の余地を私に残してくれた。次回自分が日本を訪れた際は、富士山の姿を目にできることを願っている。

午前、私たちはアサヒビール神奈川工場を訪れた。ビールの糖化、発酵、ろ過そして包装など一通りのプロセスを見学し、同社の最大の目標とモットーは「すべては、お客様の『うまい！』のために」という美味しさの追求であることを知った。消費者に新鮮でおいしいビールを届けるため、同社は進んだ技術と自動化された生産ラインを採用し、ビールは生産からわずか3日間で出荷されると知り、とても感服した。私は普段お酒を飲まないが、折角アサヒビールを訪れたので、是非同社のビールを飲みたいと思った。

午後は伊藤忠商事を訪れた。この日本の超大型総合商社での見学と交流において、私は1858年に設立された後、様々な困難に遭遇しつつも強い信念で今日まで発展を遂げてきた同社の歴史を知ると共に、同社の「三方よし

(売り手よし、買い手よし、世間よし)」、「一人の商人、無数の使命」といった経営理念に感動また心服した。また伊藤忠商事は「中国事業に精通したエキスパート」で、多くの中国語が堪能なスタッフを抱え、中国において幅広く事業展開をしている。

そしてこの日最も印象的だったのは、日比谷公園の松本楼で聴いた梅屋庄吉氏と孫中山氏の感動的な故事であった。当時中日関係が困難な時期にあっても、民間の交流は止まることはなかった。私はこれから中日両国の交流がますます広がることを願っている。なぜなら両国は過去や未来を問わずつながりが深く、平和的な共存や利益の共有ができてこそ、各自のより良い発展が実現可能だからである。

日 付： 5月27日（金） 4日目

大学名： 中央民族大学

氏 名： 李欣竹

箱根を離れる前に再度温泉に入ることができなかったのは残念だったが、今日のスケジュールも楽しみである。

今日の最初の訪問先はアサヒビール神奈川工場であった。アサヒビールは非常に有名で、島津製作所などの企業に比べるとより一般大衆に近い位置付けである。工場に到着すると、スタッフから温かい歓迎を受け、その後ビールの製造原理、工場の概況の紹介を受け、さらに非常に現代的な各製造プロセスを見学した。解説スタッフから工場の廃棄物は100%再利用されているという話を聞いた時は、とても驚かされた。私は日本がこれほどまで真摯に環境や資源の保護に取り組んでいるとは思っても寄らなかった。その後皆で出来立てのビールの試飲をしたが、あまりにも美味しく、皆は10分間で3杯も飲んでしまった。こうして同社の「最高の品質をお客様にご提供する」という目標は決して口先だけではないことを改めて認識した。

楽しい焼肉でアサヒビールの見学を終えた私たちは、東京に向けて出発した。東京での最初の訪問先は日比谷公園の松本楼である。ここは日本で最初にできたフランス料理店とのことだが、それよりも重要なのは、この初代社長は孫中山氏の親友で、更に言えば、松本楼は中日友好の象徴であり、以前には胡錦濤主席もここを訪れているということである。私はこの松本楼で当時のお話を聴けることを、とても光栄だと思った。

今日は少し忙しく、その後さらに伊藤忠商事を訪問したが、そこでは私は皆さんの中国への熱意に心を打たれてしまった。ほぼすべてのスタッフが中国語を話すことができ、会社の規模は、中国でも日本でも非常に大きく、中国人学生の加入を心から願っていることが明らかに見て取れた。そして同社への理解を深め、スタッフの皆さんと夕食を共にした後、個人的には同社へ大きな興味が湧いた。

こうして充実した一日も終わったが、今晚のホテルはとても高級で感動した。そして自分は恵まれていると思った。そして赤坂をしばし散策して、東京の夜の華やかさを体感した。

日 付： 5月27日（金） 4日目

大学名： 北京工業大学

氏 名： 于鑫淼

私はかつて燕京ビールの工場を見学したことがあり、今日はアサヒビール神奈川工場を見学した。二つの工場はいずれも自動化の生産ラインを採用しているが、唯一違ったのは、工場の廃棄物処理についてである。アサヒビールでは原材料の資源利用は100%に達しており、工場ではごみを50数種類に分類している。また、ビールの生産工程において生じる排出物はスタッフの制服の原料の一部にもなっているという。アサヒビールは127年の歴史があり、この間様々な改革をしてきたが、その中でも変わっていないのはスタッフの仕事へのひたむきさである。アサヒビールは専門の検査スタッフを配置し、日々生産されるビールの味をチェックしている。またアサヒビールは環境保護事業のテーマとして「自然の恩恵を明日へ」を掲げている。

日比谷松本楼では、孫中山氏と梅屋庄吉氏の深い友情について理解を深めた。「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援す」、これは彼らの間に交わされた盟約であり、梅屋庄吉氏は辛亥革命による清政府打倒に非常に大きな貢献をされた。

伊藤忠商事では、役員およびスタッフから温かい歓迎を受け、非常に有意義な交流を行った。また同社の大部分の人が流暢な中国語を話し、中国文化が好きとのことであった。伊藤忠商事のコーポレートメッセージは「一人の商人、無数の使命」である。またかつて業績不振の際に、同社は資源以外の分野への大規模投資に素早く転換を図り、リスク管理を強化した。たとえ企業の危機的状況であろうと、正しく対応することで、それは良い方向へ進む転換のチャンスとなることを知った。

伊藤忠商事には多くの子会社や関連企業があり、製品は様々な分野にわたっている素晴らしい企業であった。

日 付：5月28日（土）5日目

大学名： 清華大学

氏 名： 李維唐

とても楽しみにしていたホームステイだが、当初ホストファザーが64歳のおじいさんと知り、頭の中が真っ白になり、融通がきかず面白みに欠けるのではないかと思っていたが、結果的に彼は私に大きなサプライズをくれた。

最初は彼の身分である。当初私は彼が一般のサラリーマンで、今回ホームステイを引き受けたのだと思っていたが、実は某企業の社長であった。50数カ国を旅したことがある社長の様子など、私に微塵も感じさせなかったのである。

二つめは彼の中国語である。私たちは当初英文メールでやりとりをしていた。事前に私が受け取った資料では日本語と英語が話せるとだけあったが、実は彼はここ4年間、毎週中国語のクラスに通い、毎日中国語を学んでいたのである。そのため彼の中国語のレベルは中国において中国語だけで生活ができるほどであり、私たちの英語や中国語での交流は何の問題も無かった。

三つめはホストファミリーのおもてなしである。これはあらゆる面で感じられたが、印象深かったのは贈り物である。ホストファミリーのお宅にお邪魔してすぐ、ホストファザーは私に一枚の記念硬貨をくれた。それは中国銀行が1979年に発行した外貨兌換券で、友誼商店での買い物に利用可能なものであった。そこで私も準備していた贈り物である劉備、関羽、張飛の3つの木製のくしを彼らに渡した。するとホストファザーはさらに歯ブラシからボールペンまで様々な小物が詰まった大きな袋を私にくれたのである。その時私はあっけにとられてしまった。

またその他にも、優しいおばあさん、きれいな娘さん、優秀な娘婿さん、そして三国志の物語など様々な嬉しい驚きがあり、今日はとても楽しい一日であった。それからお昼に食べた美味しいラーメンも忘れられない。三好敏裕さん、有難うございました！

日 付：5月28日（土）5日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 倪楠

最も楽しみにしていた2日間のホームステイがいよいよ始まった。

私のホストマザーである森さんが足に怪我をされたため、彼女は同僚の西山さんに私の迎えを頼んでいた。そして私の他、北京工業大学の団員一人とともに遊覧に出発した。まず私たちは浅草寺に向かった。浅草寺のおみくじは良く当たると聞いていたので、歩行者用道路を過ぎて本堂の前までやってきた私は、待ちきれずおみくじを引いたところ、吉を引き当てた。おみくじに書かれている様々な良い兆しに、私はとても嬉しくなった。お昼は西山さんの案内の下、大阪名物の「お好み焼き」を食べた。店員さんが持ってきたお椀の中にある野菜や肉そして生地をかき混ぜて鉄

板の上にのせ、中国の煎餅のように焼いて食べるのだが、味も美味しく、焼く作業もとても楽しかった。午後私たちは上野公園を散策した後、東京駅の書店や文具店をまわったが、西山さんは常に親切にいろいろと教えてくれて、とても楽しく見物をする事ができた。

夕刻私はJR線で豊田駅に到着し、駅から出るとすぐに「熱烈歓迎」のプラカードを掲げた森さんとその弟さんの姿を見かけた。足に怪我をしているのに、松葉づえをついて駅まで迎えに来てくれたことに私はとても感動してしまった。そして皆さんと挨拶を交わした後、私たちはスーパーに夕食の食材を買いに行った。ついに日本の家庭での生活が始まった。メロン、ぶどう、トマト、お刺身、たこ、牛肉、てんぷらなど私たちはカゴいっぱい買い込んで帰宅した。ホストマザーの勧めで、私は先にお風呂を済ませて戻るとホストファザーは沢山の料理を準備してくれていた。そしてホストマザーからは、生わさびのおろし方から手巻寿司の作り方まで教わり、日本の家庭での和式の夕食を楽しむことができた。またこの日はちょうどホストマザーと旦那さんの24回目の結婚記念日で、ビールを片手に美味しいお寿司や焼き肉を食べながら多くの話題に花を咲かせ、楽しい夕食の時間を過ごした。その後、私は後片付けを手伝い、ごみの分類を学んだ。そして北京から持ってきたお菓子を皆さんと食べてから、明日の活動に備えて休息となった。

日 付： 5月28日（土） 5日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 王雨薇

今日はホームステイの初日で、私はついにホストファミリーのお父さんとお母さんに会うことができた。

そしてとても驚いたのは、ホストファザーであるテルモの三井さんは中国で12年勤務されていたので、中国語が非常に流暢で、私たちはより深い交流ができたということであった。

そして話をしていくうちにさらに驚いたのは、三井さんは私と同じく伝統文化が好きであったということである。そのため私たちは伝統文化への愛着が故に北京を愛し、また故宮、頤和園、琉璃廠などはいずれも共にお気に入りの場所であった。こうした思いがけない共通点により、三井さんがプランを立てた今回のスケジュールに私は「一目惚れ」してしまった。

浅草寺や皇居といった場所は言うまでもなかったが、思いも寄らなかったのは、三井さんが私を川崎市の「日本民家園」に連れて行ってくれたことである。

民家園内の建物はいずれも日本各地における各時代の実際の民家を移築したもので、民家園に足を踏み入ると、まるでタイムマシンに乗って明治時代や大正時代といった異なる時代を自由に駆け抜けているような感じがした。

正直に言うと、これは私がこれまで全く知らなかった東京の一面で、これほど歴史のある面白いものを目にすることができるとは思いも寄らなかった。今回のホームステイの割り当ては多分天意だったのであろう。

日 付： 5月28日（土） 5日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 熊瑋

なんと言おうべきか、今日の気分は少し複雑であった。実のところ、自分のその複雑な思いをここに書いていいのかどうかも分からない。しかし正直な気持ちを書くということなので、私はここを自分自身の日記として、思ったことを書きたいと思う。昨日の伊藤忠商事訪問の際、私はホストファザーの沼尻さんと会うことができた。その時彼は直接また正直に彼の考えを教えてくれた。それは、彼の家族には中国人に対しての誤解があり、中国人は怖く、煩わしく、付き合いにくいと思っている。そのため彼はこの機会を利用して彼の家族に本当の中国人はどういうものなのかを知って欲しいというものであった。その他、明日は北海道旅行から戻る長男の出迎えや、昼12時半からの次男の運動会があるため予定が埋まっていて、初日については私個人のための別の予定は組んでいないとのことであった。それを聞いた私は

気持ちが半分冷めてしまったが、それでも今回は友好交流ということもあり、その後も色々とおしゃべりをした。そのため、今日私は不安な気持ちでホームステイの初日を迎えたのである。

他の団員が様々な観光地を回るのに比べ、私の方はごく簡単なものであった。まずは道路標識と交通ルールを学び、その後とある神社へ行った。ただ最も印象的だったのは息子さんの運動会であった。赤、青、白のチームに分かれた小学生たちが、自分たちのチームの榮譽のため一生懸命に努力している様子に、私はとても感動した。6年生の学生が体操を披露している時沼尻さんは、これは彼らにとって小学生最後の運動会だから、皆絶対負けないという気持ちで頑張っているのだと教えてくれた。そして最後に6年生の学生による組体操を見た時、私たちは皆涙が溢れてしまった。

楽しさと感動があり、もちろん疑問もあった。

さあ、あしたは？

日 付： 5月28日（土） 5日目

大学名： 中央民族大学

氏 名： 龍順欣

今回の8日間のスケジュールの中で、私が最も緊張するのはホームステイである。なぜなら異国の地で見知らぬ家庭に入り生活をするため、何か失礼なところが出てくるのではないかと不安だったからである。しかし、お話をするとすぐホストマザーがとても優しい人だと分かった。そして事前に色々予定を組んでくれていた。浅草寺の人の多さには、北京の前門のようななつかしさを感じた。

そして最も楽しかったのは東京国立博物館の見学であった。そこでは本物のミイラや中国関連の展示品などを見かけた。そして本館ではこれまで書籍でしか目にすることがなかった日本の文化遺産を直に見ることができた。ただ時間の関係でゆっくり見られなかったのは少し残念であった。

私はこれまで日本のゴミの分類にとっても興味を持っていた。そのため、帰宅後私はまず日本の家庭のゴミの分類方法についてたずねた。そして船橋市においては、ごみを5種類に分けており、各家庭においてハンドブックに記載の要件に従ってごみの分類をしているとのことで、一般の日本人の環境保全への責任意識の高さを知ることができた。その後私たちはホストマザーのお母さんの家で夕食となった。現在高校三年生の息子さんとホストマザーのお父さんは興味津々で私と中国の唐詩や三国時代の歴史についておしゃべりをした。しかし私の日本語のレベルの問題でうまく話せないところについては、漢字を見れば互いに意味は分かるので、紙に書いて説明をした。世界でも日本以外にこうして中国人と親しく交流できる国はないと思った。

日 付： 5月28日（土） 5日目

大学名： 北京工業大学

氏 名： 尚芳

今日は特別な日である。この週末、私はホストファミリーと共に過ごし、現地の日本人の生活を体験するのである。

西山さんは私のホストファザーであり、私が日本に来る前からラインを交換し、私の希望などを聞いたうえで細かいスケジュールを作り、あちこち私を案内してくれた。まず私たちは都内でも長い歴史を有する浅草寺へ向かった。そこは北京でいうところの南鑼鼓巷に似たところで、多くの特徴的な商品を売る小さなお店が立ち並んでいた。その後私たちはドラッグストアに向かった。そこは値段がとても安く、西山さんがわざわざ事前に調べてくれた場所であった。その他私たちは東京スカイツリーなどのスポットを巡り、記念写真を撮った。私は西山さん自身も自撮りが大好きなのだろうと思った。

夕刻になり私は西山さんのお宅に到着した。そこではホストマザーがとても温かく歓迎してくれ、夕食として焼肉をご

ちそうになった。そして私が中国から持参したお礼の品を二人にプレゼントすると彼らはとても喜んでくれた。その後私たちは夜遅くまで色々おしゃべりをして休息となった。お互いに中日の文化などについて知ることができ、私はとても貴重な沢山の知識を得ることができた。

日 付： 5月29日（日） 6日目

大学名： 清華大学

氏 名： 王宝源

ホストファミリーと共に過ごした2日間で、私は加藤さんご夫婦と深い友情で結ばれた。

日本は先進国の一つであるが、その発展度合は生産力といったものだけでなく、それ以上に日本人の生活様式や社会秩序に表れている。加藤さんの奥さんのお話を通じて、私は、30年前の日本は現在ほど秩序立ってはおらず、人々も現在ほど礼儀正しくはなく、また現在ほど列をしっかりと作ることもなかったが、その後数十年の発展において日本は次第に調和が取れてきたことを知った。現在の中国はあるいは以前の日本に少し似ているかも知れない。中国は経済の高度成長期にあり、全体的な経済力としてはすでに日本を超えたが、中国の発展はバランスの悪い発展と言わざるを得ず、今後中国としては生産力や核心技術の研究開発以外に、さらに市民生活を重視したよりバランスのとれた発展をしていかなければならない。

この日、私はホストファミリーとともに東京スカイツリーや銀座を見学した。お昼は銀座でラーメンを食べた。以前から日本のアニメなどを見ていて、是非日本のラーメンを食べたいと思っていたが、今日ついにそれが叶った。その味は想像していた通り美味しかった。

しかしながら今日は加藤さんご夫婦とお別れをしなければならない日である。2日間の交流において彼らは私の父母のようであった。私たちはお互いに腹を割った交流をし、そして楽しく遊んだり買い物をしたりした。お別れは辛いですが、私たちは互いに深い友情で結ばれた。そして私たちは、次回加藤さんご夫婦が北京に来た際、または私が再度東京に来た時の再会を約束した。

日 付： 5月29日（日） 6日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 鐘錦涛

昨晩はよく眠り、ホームステイの2日目が始まった。朝、目が覚めるとホストマザーが朝食の準備をしていて、ホストファザーは花へ水をやり、また魚へエサをあげていた。実際のところ、中国と日本そのものの違いを除けば、各家庭の生活自体はこまごまとし、また平凡でありとても良く似ている。私はここから、日本と日本人を見る際は様々な角度から理解そして体感し、国籍だけでなく、その人自身、職業、年齢など多くの角度から日本を感じなければならないと思った。

朝食を済ませた後、彼らは先祖から受け継いでいる着物を取り出して私に着せてくれ、日本の伝統服飾文化を直に体験させてくれた。この他、コーヒー豆の挽き方やその他様々な便利でユニークな道具の使い方を教えてくれた。その後、私たちは近所の市場で買い物をし、普段の生活を体験した。

今日最初に訪れたのは上野公園にある東京国立博物館で、主に縄文時代以降の日本の美術作品を見学し、美術の視点から日本の歴史を知りとても有意義であった。その後の時間は上野公園内で日本各地の特産品を食べた。そして16時に彼らは私をホテルまで送り届けてくれて、今回の短くも楽しいホームステイ生活が終わった。

「走近日企・感受日本」は今回の訪日のテーマであるが、私はホームステイこそが「感受日本」におけるもっとも重要な活動だと思う。日本の一般家庭において彼らの日頃の生活を体験でき、私は心から日本という国に感動した。そして彼らの生活の中また側面から日本人の生活への態度や、人々そして物事への態度を垣間見た。「其の善なる者を択びて之に従う」、中国人が日本人に学ぶというだけではなく、一個人としての学習と進歩が知らず知らずのうちに自

分を変えていくのである。「感受日本」とは、この国のみならず、一般市民の生活を感じることである。

日 付：5月29日（日）6日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 呉佳芮

時間が過ぎるのは早く、ホームステイも終わろうとしている。柴田さんご夫婦との2日間の交流では、一緒に遊んだり写真を撮ったり、また浅草寺や東京タワーにいくなど私は彼らからのもてなしの気持ちと中国への好感を強く感じた。

今日の朝、とても面白いことがあった。柴田さんの家の前には公園があるのだが、毎年一度掃除イベントが行われ、私も運よくそれに参加したのである。そして朝の9時になり、近所の大人や子供がそれぞれビニール袋片手に元気一杯にごみ拾いを始めた。しかし困ったことに、私は10分以上歩き回ってもごみ一つ見つけられない程、そこはきれいだったのである。また彼らは、おもちゃのピストルの小さな弾ですら一つひとつ拾っていた。日本の道路がきれいな理由を私はついに知ることができた。

お昼はホストマザーと一緒にご飯を作った。日本の台所は調理器具や食器などが沢山あるが、皆きれいに並べられていて、とても整然としていた。料理をする際も日本人の繊細さに気が付いた。15mLは15mLで、それより多くても少なくてもだめなのである。また彼らのごみの分類はユニークで、週に一度回収されるが、もし分類が違っていれば、そのごみは一度持ち帰り、自宅に一週間置いておかなければならない。そのため、皆はルールに従い慎重にごみを分類しているのである。

2日目のホームステイ体験もとても楽しく、お別れがとても辛かった。また会えることを願っている。

日 付：5月29日（日）6日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 胥珂

今日はホームステイの2日目、朝ホストファミリーのお父さん、お母さんそしてえりこさんは私を連れて散歩に出かけた。お父さんはまたカメラを持参し、道すがら私たちを写真に収めていた。私は我孫子市の生態環境はとても素晴らしいと思った。散歩の途中には様々な鳥、魚を見かけ、またハクチョウやコハクチョウまで見かけた時はとても驚いてしまった。路上の人々は皆のんびりとし、また表情からもとても嬉しそうで、静かな生活を楽しんでいるようであった。また東京ほど賑やかではないが、生活の息吹に満ち、生活に適した場所である。しかも、ここの人々は草花を愛し、ほぼ各家庭では庭先に様々なきれいな花を植えていて、生活への情緒が感じられた。

小田さん一家には、今回着物と茶道の体験を手配いただいて心から感謝している。教科書の知識やドキュメンタリーで観た物を直に体験し、深く日本の文化について知り、多くを学ぶことができた。先生もまたとても友好的で、着物の着付けの方法、そして「止め石」とは何かなどを教わり多くの収穫があった。日本文化には本当にたくさんの面白さがある。ただ、楽しい時間はあっという間に過ぎていくもので、午後2時過ぎには、皆と集合し次の目的地に向かうためホテルに戻らなければならなくなった。お父さんは今回の思い出を残していけるようにと、撮り終えた写真を全て現像し私にプレゼントしてくれた。そして最後にホテルでお別れをする際、私はえりこさんと抱擁を交わし、北京での再会を約束し合った。

この2日間私は本当に幸せだと思った。今回の8日間の訪日交流の他、ホームステイではとても親切な日本人とめぐり合えたのである。本当にありがたいです！

日 付：5月29日（日）6日目

大学名： 中央民族大学

氏 名： 申成日

ホームステイの2日目。朝食は皆でトーストを食べたが、ホストマザーは朝早くに起きて朝食の準備をし、ホストファザーは日本のテレビドラマのように届いたばかりの朝刊を読んでいた。私はホストファミリーをととても羨ましく思った。

午前、私は子供たちと勉強半分そして遊び半分の日本の子供式の時間を過ごした。遊びの際は彼らが真剣に教えてくれ、勉強の際は私も真剣に教えた。私たちの間には何の隔たりも無くとても楽しかった。私たちは8時に家を出発して目的地の新宿に向かった。またその途中では代々木公園にも立ち寄った。ここは本当の意味での公園で、子供たちは遊び、大人たちは陽の光を浴びていた。学生たちはサッカーなど球技に打ち込み、また時折デートをしている若いカップルも見かけた。中国ではこうした公園はあるかを考えても正直なところ思い浮かばない。私はこうした彼らのライフスタイルにととても憧れている。

昼食の時間になり、私たちは新宿のうどん屋にやってきた。ここで私はカレーうどんを注文したのだが、本当に忘れられないほど美味しかった。その後私たちは展望台に行き、そこから東京を一望した。様々な建物がひしめいていて、道路がほとんど見えなかった。これには、この都市がどのようにこれほど多くの人々を抱えているのかを知った思いがした。

楽しい時間はあっという間に過ぎるもので、1日半のホームステイも間もなく終わろうとしていた。彼らは私をホテルまで送り届けてくれ、お別れの際は私にプレゼントまでくれた。その時私は、見ず知らずの私に彼らがこれほどまで親切にしてくれたことに、感動のあまり涙が止まらなかった。今その情景を思い出しても目頭が熱くなってくる。どんなに楽しい時間でもいつかは終わってしまうのである。31日にまた会いましょう。

その後お台場に行った。お台場の景色はとてもきれいだったが、ホストファミリーの笑顔ほどではなかった。おやすみなさい。

日 付： 5月29日（日）6日目

大学名： 北京工業大学

氏 名： 曾檬

今日はホストファミリーのお父さんとお母さんと海辺でバーベキューをし、日本の一般家庭の週末を体験し、私は日本人の仕事の際の真面目な様子と休みの時のリラックスした様子を知ることができた。

昨日私は日本人の仕事へのひたむきさを目にした。アイスクリーム店のスタッフたちは歌を歌いながらアイスクリームを作っており、しかもそれぞれのアイスクリーム毎に歌が異なっていた。皆は沢山の元気と笑顔で仕事をしていて、それは見ているこちらがまるで仕事がとても楽しいものに感じられ、アイスクリームにもそうした楽しさが込められ、味もより美味しく感じられた。もちろん仕事は仕事であり、休みの際は皆とてもリラックスするのである。ホストファザーについて言えば、彼は伊藤忠商事の社員で、昨日お会いした際はビシッとしたスーツ姿であったが、今日の海辺でのバーベキューではとてもやさしかった。そして家ではとても良きお父さん、さらに奥さんを大切にする良き旦那さんであり、仕事においては責任感を持ち懸命に働く良き社員である。こうした責任感ほど素晴らしいものはない。

ホストファザーとの交流を通じて、日本と中国はお互いに相手への深い理解ができていないと思った。私たちはこうした民間の交流活動を強化し相手への理解を深めるべきで、そうすることで互いに学び合えるようになるのだと思った。

日 付： 5月30日（月）7日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 鄭雨奇

午前はみずほ銀行を見学した。その際私は2つの感想を持った。まず、銀行のスタッフは自分の持ち場で懸命に仕事をしており、私たちの訪問の影響を受けず、自分のすべきことに集中していた。こうした職場の雰囲気はとても素晴らしいと思った。まさにこうした理由でみずほ銀行は日本の三大銀行の一つとなったのであろう。次に、銀行は絶えず新たな技術や機械を導入して、顧客へより細やかなサービスを提供していた。例えば、新型の書類記入の機械、古い通帳を新しい通帳に換える機械、可愛いロボットなどである。さすがはみずほ銀行であり、先々を見通し、時代の流れを掴み、顧客へ優れたサービスを提供している。

午後は光栄にも大使館を訪れた。そして訪日団の各学校の代表者の発表、そして薛参事官のお話に耳を傾け多くの収穫が得られた。それは主に以下の数点である。一に、中日両国の漢字には相通じるものがあるということである。かつて他の国も中国の漢字を使用していたが、その後次第に新たな文字を生み出し、漢字の使用をやめてしまった。そして現在では日本一国だけが中国の漢字を使い続けているのである。そのため中日両国には非常に密接した文化的関係がある。二に、過去だけを見るのではなく、将来に目を向けなければいけないということである。何かと過去を蒸し返すことには何の意味もなく、心配や困難といったものをもたらすだけである。過去は忘れてはならず、歴史から教訓や経験を汲み取ることは必要だが、過去にだけ囚われていてもだめなのである。また、偏った情報だけを頼りに生活していてもだめである。良くない過去に拘ることができるのに、何故友好的で素晴らしい過去に目を向けることができないのであろうか。現在でも一部の人は、日本について語るとき必ず抗日戦争や尖閣諸島などの話をするが、実際には沢山の友好的な中日交流の事例が存在しており、彼らはそれが見えないまたはそれに対して注目できないのである。しかし本来は、あらゆる側面から客観的に日本を見て日本を知らなければならないのである。

最後に私たちは早稲田大学を訪れ、早稲田大学の学生との交流を行った。彼らはとても親切また優秀で、交流の際は彼らの学問に対するひたむきさと情熱を感じ、さらに彼らの私たちへの友好的な姿勢やおもてなしといったものを感じることができた。私はこうした中から中日両国の大学生の元気と活力を感じた。中日両国の大学生の働きの下、私は将来中日両国がますます発展していくことを信じている。

日 付：5月30日（月）7日目

大学名：北京第二外国語学院

氏 名：胥珂

明日には中国へ戻る、時間が過ぎるのは本当に速いと思った。今日の予定もこれまで同様ざっくりである。午前私たちは三菱東京UFJ銀行や三井住友銀行と並び称される日本の三大銀行の一つであるみずほ銀行を訪れた。そしてみずほ銀行中国営業推進部の廣瀬部長から、みずほ銀行の他の銀行と異なる三つの特徴についての紹介を受けた。最初の特徴は、同銀行は国際業務において単独で「中国営業推進部」を開設したことで、こうした中国と名の付く体制は日本の銀行の中でもみずほ銀行のみである。二つめの特徴は、同銀行は1979年以降、毎年中国向けの金融研修コースを継続している。三つめの特徴は、銀行内部にコンサルティング部署を設置し、顧客との信頼関係を構築していることで、顧客の利益を最優先する「お客様第一」の企業理念は、みずほ銀行の業務展開をますますスムーズにしている。お昼の懇親会では、中国の深セン支店から日本に研修に来た中国人スタッフと交流し、彼らからは日本語を専攻する学生が銀行に就職するためのたくさんの方法を教わり、自分自身における新たな道筋が見つかった思いがした。

午後二時、私たちは中国駐日大使館を訪れた。そして参事官からはユーモアあふれる言葉で中日関係がどうしても「にぎやか」なのかの紹介と、両国の交流にはまだまだ潜在力が残されており、双方向の交流は持続可能なものだというお話があり、本当にその通りだと思った。双方ともに相手への情報獲得が不均衡であるため、時に大きな偏りが生まれてしまう。そのために交流が必要であり、また交流の力を信じなければならない。

その後、私たちは早稲田大学の学生との討論と交流を行った。日本の学生は私たちに親切にしてくれただけでなく、プレゼントのお返しもしてくれ、とても感動した。

日 付：5月30日（月）7日目

大学名：中央民族大学

氏 名：鄭縁童

2日間のホームステイが終わり、私たちの企業見学の活動が再開された。今日の最初の訪問先はみずほ銀行である。みずほ銀行は日本の三大銀行の一つで、中国とは密接な関わりを持ち、中国において多くの支店や事務所を構えている。銀行のスタッフの案内で私たちは業務ホールや事務区域を見学したが、書類の記入コーナーにある様々な度数の老眼鏡や案内サービスを提供するロボットのPepperなど、同銀行における全てのサービスや施設からはお客様第一の経営理念が感じられ、こうした細部からは日本人そして日本企業の繊細さや人間本位の姿勢が感じられた。

午後私たちは中国駐日大使館を訪れた。そして各学校の代表者からこの数日における感想などの発表があり、皆は様々な収穫が得られたようであった。その後の参事官からのお話を通じて、中日両国の間にあっては、対立というものは避けられないが、それでも互いの友好への情熱は、私たち皆が共に維持していかなければならないと思った。

大使館を離れた私たちは日本の著名な私立大学である早稲田大学を訪れ、同大学の学生と将来や人生設計、また興味のある書籍などについて討論や紹介を行った。こうした中日両国の大学生同士の交流は、文学の交流に止まらず、両国の文化の違いの比較であり、他国の大学生そして同年代の若者の考えを知る機会というのは非常に得難いものであった。将来彼らと再会できることを願っている。

日 付：5月30日（月）7日目

大学名：北京工業大学

氏 名：于鑫淼

2002年4月、第一勸業銀行、富士銀行、日本興業銀行の3行の統合によりみずほ銀行は発足した。みずほ銀行は世界でも最大級のフィナンシャルグループの一つとして、大企業、金融機関および海外の重点企業を主な顧客としている銀行である。

みずほ銀行は、細やかなサービス、美しい環境そしてハイテク設備を兼ね備えた銀行で、効率的で安全なサービスを提供している。金庫のドアは防弾防震構造で、内部は定温である。その他ロボットの活用により顧客の待ち時間の有効利用を模索している。こうした点からも、みずほ銀行はすでに成熟しつつも、謙虚な姿勢で更なる発展をしていることがうかがえた。

また中国駐日大使館の薛参事官からは、手厚いもてなしを受けた他、さらに中日両国の関係についての踏み込んだお話をうかがった。その内容は主に、隣国間では何らかの対立が起こることは避けられないが、互いの文字や文化は似通っており、良き隣国関係を構築する努力をしていくべきである。また過去には戦争があり、互いに大きな傷を負ったが、私たちはいつまでも過去に拘ってはいけず、将来を見据える必要がある。歴史を変えることはできないが、未来は共に創り上げることができるのである、といったものであった。

早稲田大学の学生との交流もとても楽しく、中国、日本、韓国の学生が同じ教室内で討論をし、互いに人生設計や近頃読んだ書籍などについて語り合った。もし中国、日本、韓国の三国間もこれほど打ち解けることができれば、どれだけ素晴らしいことであろうか。晩餐会では互いに日本語と英語を交え、自分の趣味や自分の学校について語り合った。そして私は三人の友人を作ることができ、互いの連絡先を交換した。これからも交流を続けていきたいと思う。

日本は成熟した国だが、またとても謙虚な国でもあり、絶えず優れた技術を開発し、またそれを有効利用している。私はこの日本という国が好きである。

日 付：5月31日（火）8日目

大学名： 清華大学

氏 名： 殷晨

ホテルニューオータニでの4日目、私たちは地下三階の環境保全施設およびリサイクルシステムを見学した。

汚水処理+余熱/熱力発電システム+最大限の「物質再生化」、ホテルニューオータニは1960年代に創業して以降、変わらず環境への優しさにおける模範的役割を担っている。ホテルにおける毎日の水や電気の消費量は大きく、資源消費が速いため、同ホテルでは、建築時から地下に小型の発電システムを作ることによって自身のエネルギー消費を最大限補っている。

同時に、毎日発生する汚水は微生物や沈殿-ろ過といった浄化プロセスを経て、新たな役割の下、水資源の節約に貢献している。

空間を最大限利用し緑化面積を増やすことで建物への「エコ降温」を行い、電力を節約し、発電時の水蒸気の余熱を厨房において再利用するなど、こうしたホテルニューオータニの環境保全意識はいずれも私たちを感嘆させるものであった。同様にエネルギー消費大国である中国では、こうした環境保全意識を持つホテルはほとんど見られない。自然界の資源には限りがあるため、これは中国の多くの企業が再認識すべき問題である。

これまでの7日間における企業見学でも、それぞれの企業が程度は異なれども、自社の社会的責任への取り組みというものを示していた。これには先進国の資源や環境への重視度合の強さというものが感じられた。しかしこうした日本においても、過去の環境悪化の弊害を経験して、初めて環境保全に目覚めたのである。そして現在、中国が直面している環境問題は多いため、一日も早く皆が環境保全を意識し、より良い地球環境構築のための貢献を積極的に行う必要がある。

より責任感のある大国となるために、中国には行動が必要である！

日 付： 5月31日（火） 8日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 于孟鑫

今日は帰国の日であり、お別れの日でもある。

午前はずっと私たちがこの三日間お世話になったホテルニューオータニを見学した。同ホテルはあらゆる側面からゲストをもてなしているため、サービスは様々な角度そしてあらゆる方面をカバーしている。また同ホテルではさらに先進的な100%のリサイクル利用を行い、資源を節約し、環境への影響を最小限に抑えている。

お昼は歓送会で、私のホストファミリーも駆けつけてくれた。お母さんは着物を身を包んでいたが、そこから彼女のこの歓送会そして私への思いが感じられた。しかもお母さんは私のために自家製のパンも持ってきてくれた。その中には日曜の朝に食べたチーズパンやその他のパンもあった。私はこの時、自分の気持ちをどう表現して良いかわからず、特に日本語ではわからなかった。今回私はこれほど優しく、きれいで、面倒見の良いお母さん、そして心優しいお父さんに出会えたことに、嬉しさと感謝を感じている。お母さんはずっと、「きんきんが一番かわいい。そんないい子を娘にしてよかった。」と言ってくれた。私はお母さんから勤勉さ、礼儀、そして生活への姿勢などたくさんを学んだ。お母さんはいつもどんなことがあろうと、その中から良い部分を見つけ、さらに生活のあらゆる場面で感謝できる部分を見つけ出しては、「よかった」と口癖のように言っていた。例えば、駐車時間が丁度1時間であったり、美味しいトンカツを食べたりした時などがそうで、常に意欲的で楽しく生活と向き合っていた。ホストファミリーとの交流の時間は短かったものの、彼らのおもてなしに対して私は言葉が見つからないほど感動した。

お別れの時は涙が止まらなかった。皆の前では泣かないよう懸命にこらえていたのだが、それでも目と鼻が赤くなってしまった。空港へ向かうバスに乗る時、それはこの8日間私たちの面倒を見てくれた中島さんと間もなくお別れすることも意味していた。皆がこうして一緒にいられたことは一つの縁であり、私たちは互いのこうした縁を大切に、さらに継続させていかなければならないと思った。

日 付：5月31日（火）8日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 何鑫穎

締めくくりの一日。

今日は最終日で、私は飛行機の中で今回の訪日活動や中日関係についての思いをまとめていた。

まず日本には自然とその先進的な部分があり、様々な人に優しい設計や機械によるオートメーション化、業務のプロセス化といったものは人々の生活に大きく関わっており、さらに日本人の環境に対する配慮といったものは多くの中国人が見習うべきものだった。

ただし、私たち自身もひたすら外国を崇拝し、自国さらには自国の文化を卑下してはだめなのである。今回日本を訪れたが、実のところ自分が思っていたほど素晴らしいというわけではなかった。日本人の中にも中国人のような振る舞いをする人はいたのである。一方で、日本人との交流ひいては中国人自身の言葉において、現在の中国の経済や環境の状況は悪いという声を聞く。しかし私は実際の状況はそうではないと思う。私たちは中国の新たな発展の原動力として、自分たちの国や自国の文化を正視し、真実の、また客観的な中国を世界に示す必要があると思う。

現在中日双方にはまだ多くの交流の可能性が存在しており、真に中日友好を実現するためには私たちが共に努力する必要がある。

日 付：5月31日（火）8日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 許祿野

今日は訪日活動の最終日である。昨夜は寝るのが遅かったのか、或いはここを離れたくないからなのか、今日の目覚めは一際遅かった。最終日、この言葉を口にするのも寂しいものがある。そしてこの最終日、私たちはもう慌ててどこかに向かう必要はなく、また発表の準備をする必要もなく、そして今日の昼食は和食なのかと気にする必要はないのである。この日私たちは3日間お世話になったホテルニューオータニを見学した。ここはエコや環境保全、そしてリサイクルの典型といえる場所で、ホテル独自の小型発電施設やローズガーデンなどを見て回った。同ホテルのエコ環境は素晴らしく、こうしたリサイクルシステムは私たちが学ぶべきものだった。

お昼はホテルニューオータニ内で歓送会が開かれた。その場の雰囲気は熱気に溢れ、またとても感動的であった。特に沼尻さんと熊璋さんの最後の抱擁には、私も思わず涙してしまった。本当に今回の訪日活動は、双方の努力により中日の友好に大きな貢献をしたと感じた。特にホームステイは、人々の中国人への、ひいては中国への見方を変えてくれるものであり、これはとても意義深く、さらに偉大なものだった。これからもこうした機会により、中日友好に貢献していきたい。

最後は私たちを8日間乗せ続けたバスで空港に向かった。私は早くも毎日白いシャツに身を包んだこの運転手さんを懐かしく思い、皆もとても名残惜しそうにしていた。そして中島さんは自分の子供たちを見送るように、私たちをセキュリティチェックの場所まで見送ってくれたが、私は子供の様に泣いてしまうのが怖くて、後ろを振り返る勇気がなかった。今回はわずか8日間の旅であったが、私にとっては人生の中で忘れられない体験となった。以前は、日本語を学んでいるのだから日本に来るのは当然で普通のことだと思っていたが、今は日本に来られたことがとても幸運で、大切にしなければいけないと思うようになった。北京に戻った後私たちは解散してしまうが、今回の私たち訪日団の皆が、これからもこうした初心を忘れず、各自の分野において中日友好に貢献していくことを心から願っている。

日 付：5月31日（火）8日目

大学名： 中央民族大学

氏 名： 底家銘

時間が経つのはあっという間で、昨日日本に着いたばかりだと思っていたら、今回の訪日活動もすでに終わろうとしていた。私はとても名残惜しく、日本を離れたくなかった。日本に着いたその日から、私はこの国のたくさんの優れたところに惹かれ、次第にこの国を好きになっていった。

今朝朝食を済ませた後、私たちはホテルニューオータニの環境保全のモデルや理念の見学を始め、スタッフの引率と解説により、私たちは同ホテルの廃水処理などの方法を知った。さすがに東京でも最高級のホテルであり、施設が非常に整っていて、さらに先進的であった。例えば、東京都内で広範囲の停電があったとしても、ホテルニューオータニの地下の発電施設は45秒以内にホテル内における正常な電力供給を回復することができるという。これには本当に驚かされた。

お昼は歓送会が開かれ、ホストファミリーのお母さんと久しぶりに会った。彼女が今日わざわざ時間を作って私のパフォーマンスを見に来てくれたことに、私はとても感動した。私たちは民族衣装に身を包んで踊りを披露し、現場の雰囲気は最高潮に達した。そして円満に歓送会は終了したのである。

その後、私たちはバスで羽田空港に到着し、ガイドさんや撮影チームの方との別れを惜しんだが、監督さんは涙を見せていた。私は絶対彼らのことを忘れない。今回彼らには常にお世話になった。有難うございました！

学生たちの観た日本

大学名： 清華大学

氏 名： 王宝源

テーマ： 4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

とある際の団長のお話の中で言及された通り、日本は中国の永遠の隣人であり、歴史的に見れば、中日間には多くの文化的交流や貿易の往来の他、幾度かの忌わしい戦争や摩擦があった。

戦争とは、両者にとってメリットとなるものでは永遠になく、往々にして大きな損失をもたらすものである。中日間の歴史がその点を証明しており、これからの中日間は平和的な交流が必要である。現在、日本と中国はいずれも世界における強国であり、大国間の駆け引きにおいて、「タカ派」は往々にして共倒れを招くものであり、まして中日両国の文化は本来、その源を同じくするものである。

中国のますます大きくなる市場規模や市場需要において、日本商品は頻繁に見かけることができ、その優れた品質で名高い。日本経済の中国への依存度は次第に高まり、多くの日本企業がますます中国市場への関わりを重視していることは、中国にとって新たな血液を注入することであり、それは新たな試練ももたらしている。中国企業の競争力は次第に強化され、日本企業とシェアを競い合うことになるが、これこそ中日間のあるべき局面であり、企業間の競争があつてこそ双方が互いに進歩し、競争の中で己の欠点を見つけ、絶えず革新や発展をしていくことができるのである。また当然ながら中日双方の企業や政府も競争の中で提携を模索し、共に経済や文化の発展を牽引し、国の発展過程で直面する様々な問題を解決していかなければならない。

中日間の交流はあらゆる面から促進していかなければならないが、私はこうした交流に対し、とても楽観視している。なぜなら中日両国の人々には多くの共通点があり、また多くの交流に対する需要が存在しているからである。

大学名： 清華大学

氏 名： 李維唐

テーマ： 4.日中間の交流

日本と中国は一衣帯水の隣国であり、両国間の交流の歴史は長きに渡り続いている。経済のグローバル化により各国の繋がりが日増しに緊密になっている今日、中日両国は本来より協力を深め、共に発展や進歩をしていかなければならないが、両国関係は終始、近・現代の歴史における一部の未解決の問題の影響を受けており、今後の改善の余地は大いに残されている。

多くの中国人にとって日本は鬼に近い存在であり、思い浮かぶ印象は常に日本刀を持った冷酷無比な日本の将校である。これは中日間に交流が不足している表れであり、今回8日間の日本での生活を通じて、私は日本の国、日本の民族について様々な角度から深い理解をすることができた。私はこの民族の漢族と源を同じくする文化に共感しただけでなく、さらに日本人の優しさやおもてなしの心、そして彼らの中日関係の改善を願う切実な思いを感じることができた。

予見可能な将来において、中日関係の改善には依然として私たちが多大な努力を払わなければならず、また紆余曲折もあるだろうが、両国関係が低迷している時こそ、両国間の交流を継続していくことが必要である。なぜならこうし

た状況の時こそ、私たちは互いへの敵意や固定観念を取り払い、どうしたら本当の意味で両国の人々の幸福を追求できるのかを真剣に考えなければならないからである。

私はこれから先、中国に来る日本の大学生をもてなす機会があることを願っている。教室で彼らと人生や目標について語り合い、彼らを家に招いて本場の中国の料理を味わってもらい、また彼らにおおらかで、温もりのある中国を感じてほしいと思っている。

大学名： 清華大学

氏 名： 陳文鋸

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

「学生たちの観た日本」において、私は主に日本企業への印象を記したいと思う。私たちは今回、島津製作所、アサヒビール、伊藤忠商事、みずほ銀行、ホテルニューオータニの計5社の日本企業を見学した。その中でとても感動した点としては、各社はそれぞれ異なる業種に属しているが、真剣に事業に取り組み、社会に貢献するという共通の企業精神を持っていたことである。島津製作所の「科学技術で社会に貢献する」、アサヒビールの「最高の品質をお客様にご提供する」であれ、また伊藤忠商事の「三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)」であれ、つまりは企業が自らの事業を真剣に行い、社会の一員として自身のすべきことを成すことにより、人々へ奉仕し、また社会へ貢献するということである。私は、こうした精神が多く日本の企業を長寿を支える源であり、またこうした真剣な態度は各スタッフの心にも根付いていると感じた。正に彼らの企業精神への共感や帰属感が、こうした企業精神をスローガンや教義としてだけに終わらせず、企業全体の行動規則として徹底され、彼ら自身の仕事の完成や社会への貢献につながっているのである。

大学名： 清華大学

氏 名： 殷晨

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

出会った時には互いに挨拶を交わす。たとえそれが面識のない人であっても、互いが微笑みをたたえて会釈をする、公共の場では電話に出ない、しっかりと列に並び他人へ迷惑を掛けないなど、これらは私が今回日本で身を以て体験したことである。日本人は、マナーと他人への思いやりを日常生活において極限まで高めており、こうした雰囲気の影響を受けた私も、場所を問わず会釈と微笑みで他人への感謝を表し、またいつ何をするにもまず他人の気持ちを考え、またエレベーターに乗る際は、全員が乗るまでドアを開けたままにし、公共の場では大きな声を出さず、ホームステイ期間中は数えきれないくらいのお辞儀と感謝の言葉を口にするなど、これらを積極的に行うようになった。

日本人はいつからこれほど他人を思いやるようになったのかは分からないが、日本の厄介なマナーについては早くから知っていた。そして今回日本において、初めて本当の意味で大和民族の偉大さを感じた。日本人には非常に多くの公共意識があるが、これは正に現在の中国の人々に不足している重要な素養の一つであり、この素養は往々にして最終的な国民のイメージを決定付けるものである。但し、これには日本の民族は比較的単一であるため、文化的な共通点が多く、互いが理解しやすいという理由もあるかもしれない。それに対し中国の56の民族においては、各民族間の文化的な違いがとても大きく、日本のような各人が高いレベルに達することは、それぞれの基準が違うため難しい

と思われる。皆は常日頃「国民の素養を高めなければいけない」と愚痴をこぼしているのは間違いないが、従来の悪習は昔の閉鎖的風習の名残であり、現在は多くの中国人が外国を訪れ、理解が深まることで自然とそうした環境に適応するようになった。現在世界各地において、中国語での「注意書き」が次第に少なくなっていることは、私たちの進歩に対する肯定でもあるが、日本人々と比べると、私たちが他人を思いやれる場面はまだ多い。

完全な「日本式」のマナーの実現は中国では難しいが、「中国式」のマナーはこれからさらに進歩させることができる。中国は経済発展と同時に、国民のマナーも共に進歩するものと信じている。

大学名： 清華大学

氏 名： 万正一

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

今回日本を訪れ、日本人のマナーと他人への思いやりについて感じる事ができた。

私はホテルでの滞在期間、企業見学そして日本でのショッピングなどいずれの際にも、入室時の挨拶、会釈、お辞儀、ドアを開けるサポート、エレベーターのドアが閉まらないよう抑える、お別れの際には視界から消えるまで手を振るなど、スタッフのマナーを感じる事ができた。何かを尋ねればとても丁寧に教えてくれ、もし私たちが何かミスをした場合でも、彼らは厳しく叱るのではなく、微笑みをたたえながら話をしてくれる。もちろんサービス業においては、こうした行いについて褒め過ぎてはいけないと思う。と言うのも、中国の高級ホテルやサロンのサービスマナーは日本と変わらないからである。但し日本の素晴らしいところは、こうしたマナーがハイクラスのサービス業だけに限らず、普通の家電売場や小さいコンビニエンスストア、またレストランなどでもこうしたサービスが受けられ、しかも誰に対しても平等で、外国人を差別することはないのである。路上や車内、エレベーターの中で見かける一般の日本人も皆マナーが良く、常に会釈をしており、こうした環境で生活することは人としての尊厳が守られ、他人からの尊重を感じることができると思った。

日本人の他人への思いやりも印象深いものがあった。前を歩く人がドアを通る際には後ろを歩く人を気遣い、エスカレーターや電車内にいる人は自分が他人の通る道を塞いでいないかを気に掛け、車内の人はイヤホンで何かを聴く際は、周囲の迷惑にならないよう音量を下げるのである。またより感心したのは、他人への思いやりがあらゆる施設の設計にも取り入れられていることである。例えばトイレの傍には清潔さを保つため洗浄剤が備え付けられ、温泉内のシャワーには仕切りが付いており、さらに座った状態で利用するため、水が他人にかかるのを防ぐことができる。要するに、あらゆる設計はとても気配りやサービスが行き届いているのである。日本の教育における一つのポイントとして、他人へ迷惑をかけないことが挙げられる。現在、日本の社会ではこうした考え方が実践され、他人を思いやっている。だからこそ日本の社会はこれほどまでに調和がとれ、人と人との争いも少ないのである。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 于孟鑫

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本人はこれまでずっと緻密さと礼儀正しさとで名高く、日本語を専攻する私はこれまで書籍で何度も、日本人が他人へ迷惑をかけることを嫌っているといったマナーについて学んだことがあるが、実生活において彼らが本当にそうなのかについては常に多少の疑問があった。今回私は直に日本社会を体験し、教科書での知識以外に新たな認識を

得ることができた。

日本人はきめ細かいが、実は中国人もきめ細かいのである。私について言えば、私自身も多くの細かい点に注意し、またこれらを気にもするが、常にそれを覚えているというわけではない。それに対し日本人は、ある点に注意した場合、常にそれを気につけ、さらにあらゆる手段を尽くして解決しようと行動に移すのである。

日本人は相手のことを優先的に考え、自分の事は二の次である。こうしたところは日本のあらゆる施設の人への優しさやサービススタッフの態度の素晴らしさに表れている。またホームステイの際、私が初来日ということで、日本人との習慣が異なることを気につけたホストマザーは、常に私の考えを遠慮せずに話してほしいと声をかけてくれた。そしてホームステイについては、私の日本人の一般的な生活を体験したいという希望に沿ってスケジュールが組まれたのである。

日本人は、人や物事へ接する際とても礼儀があるが、私は、これはつまり最も心地良い態度で、人との最も心地良い距離を維持しているのだと感じた。日本人は温もりのある笑顔で人と人との隔たりを取り除き、相手を気遣いこするが、困らせることはない。サービススタッフであれ一般の人であれ、皆が人と人との距離感をうまく調節している。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 倪楠

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

周知のように、日本民族はとてもマナーを大事にし、常に他人を思いやる民族である。初めて日本を訪れた私はこの点をとても強く感じた。また日本の様々な面や細部などは、いずれも日本の国民性を表していた。

日本に到着し飛行機から降りた私が印象深かったのは、日本ではどこのガラスも埃一つなく綺麗に磨かれているということである。ガラスを綺麗に磨くこと自体は難しいことではないかもしれないが、あらゆるところがこれほど綺麗だということに、私は畏敬の念すら覚えてしまった。透き通ったガラスのおかげで自由に窓の外景色を楽しむことができるので、旅の最初から視野が明るく広がるような良い気分になった。この他、私はいくつか日本のマナーへの重視と他人への思いやりを表す細かな部分を発見した。多くのトイレには用を足す際の音による気まずさを避けるため、その音をマスキングする擬音装置が付いている。またヨーグルトの蓋には特殊加工がされ、ヨーグルトが蓋に付着しないようになっており、公共の場所でヨーグルトを飲む際に蓋を舐める見苦しさや蓋を舐めないことによる浪費といった悩みを免れている。さらにホテルの化粧室の鏡の一部には曇り止めがされ、いつでも使うことができるといったことである。あらゆる設備の周到さと人への優しさは、常に自分への尊重と気遣いを感じさせてくれる。

恐らく、日本人にこうした性格が生まれたのには、その昔からの社会と一定の関連性があると思う。昔は交通が不便であったため、日本人は自分の生活する場所を離れることはほとんどなく、顔なじみ社会であったため、集落の各人は皆より良く生活するためには、周りの人と良い関係を築かなければならなかった。そのため、常に礼儀正しく他人へ接し、さらにどうしたら相手の気分を良くできるかを常に考え、他人へ迷惑をかけず、それが次第に日本人の習慣となっていた。そしてこうした習慣が製造業やサービス業などにも広がり、今日の日本のあらゆる面における人への優しさといった特徴が形成されたのだと思う。

今回の貴重な訪問において、私はこうした細かな視点からより深く日本の国民性について知ることができた。私はその長所を吸収し、帰国後に友人に紹介することで、彼らにより深く日本を知ってもらおうと思う。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 史蕊

テーマ： 1.国民性についての理解

国民性：

- 1、積極性や向上性があり、生活を心から楽しんでいる。街中で道を尋ねたり、または店で買い物をしたりする際に何かを尋ねると、日本の人々の態度はとても親切で、いつも私たちに笑顔とポジティブさを与えてくれる。これは彼らがいかに自分の気持ちをコントロールでき、楽観的で向上性があるのかを物語っている。
- 2、イメージを重視し、マナーを心掛ける。日本のサラリーマンは、出勤する際いずれもスーツを身に付けており、活力や優秀さといった印象を与える。しかも、日本の女性は身だしなみや化粧に多くの時間をかけ、最も美しい一面を他人へ見せる。これは自分を大切にすると同時に他人を尊重する表れだと思う。
- 3、自発的で、国家意識がある。すべての人、すべての家庭は国を構成する最小単位であり、個人が良ければ全体も自然と良くなる。正に日本ではすべての人が衛生面に気を付け、ごみを分類し、自発的に列に並ぶため、この国は綺麗で秩序立っているのである。
- 4、親切で客好きである。私たちが企業や大学の訪問を終えてその場を離れる際、企業のスタッフや学生は私たちの車が視界から消えるまで手を振って別れを惜しんでくれた。まさにガイドの方が言うとおり、日本人のこうした誠意は相手の心を和ませるものであり、確かに私たち一人ひとりの心は感動でいっぱいになっているのである。
- 5、信仰を重んじ、それを確実に伝承している。日本の文化であれ、または日本の企業の理念や初心であれ、いずれも見事に伝承されている。日本人は神社や茶道などの伝統文化についてこれまで先祖代々伝承を続けている。企業も終始長期的視野で段取りを踏んで事業を継続している。これも日本の多くの大企業が100年以上も発展を続けている理由であろう。
- 6、着実に落ち着いている。日本人は新たな発見があればそれを継続して研究し、たとえ何度も失敗しても、またたとえ一生涯研究が終わらないとしても研究を続けるのである。これも日本人が多くのノーベル賞を受賞している理由であろう。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 鄭雨奇

テーマ： 4.日中間の交流

日中両国の交流に関して、私は今回の日本訪問を通じて、主に以下の感想を持つことができた。

最初は、日中両国の交流における潜在力はまだ完全には発揮できていないということである。しかも日本の人々の中国への理解度は、中国の人々の日本への理解度には遠く及んでいない。ガイドの方や薛参事官からの情報によると、現在日本を訪れる中国人観光客の数は、中国を訪れる日本人観光客の2倍である。そのため、この点も双方の理解度の不均衡という問題をもたらしている。また、ホームステイ先の男の子からは、彼の周りにはまだ中国人について知らず、別の考えを持っている人がいることを知り、ホストファザーからは、メディアにおいては日本の人々が正しく客観的に中国を理解できるようなニュースがとても少ないため、日本の人々の中国への認識の偏りをもたらしているとの話があった。これらはいずれも、中国の人々の多くがこの問題をまだ理解していないことを物語っている。

次に、日中両国の交流には様々な問題が存在しているが、双方とも日中交流への努力をしており、特に若い世代の人々は、必ず日中交流を促進し、明るい未来をもたらすことができるということである。こうした感想は主に二つの方

面がその理由となっている。一つ目は、今回これほどたくさんの優秀な企業が私たちの見学を歓迎してくれたことで、これは彼らが私たちとの交流を望んでいることを物語っている。しかも、島津製作所やみずほ銀行などの企業紹介においては、中国市場は彼らにとって非常に重要であることを知った。そのため、彼らは必ず中国との交流を心から歓迎するはずである。二つ目は、京都大学と早稲田大学での交流において、彼らの心を込めたもてなしと親切さを感じたことである。しかも彼らとの交流はとても楽しく気楽で、まるで国の違いなど関係なく、私たちは皆単に青春の活力と無限のアイデアにあふれる大学生だという雰囲気であった。私たちは皆自身の理想や抱負を持っており、それを実現するために頑張っている。日中両国の将来を構築する当事者である若者世代の大学生が、これほど自然に楽しく交流できるのであるから、数十年後の両国の交流はきっと頻繁になり、両国の関係も良くなっていると信じている。そして日中両国の交流もまた、双方の努力によりきっと明るい未来になっているであろう。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 鐘錦涛

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

日本に来る前、私が日本人について耳にしていた見方は主に二つに分けられる。

一つ目は、私の先生やその他日本のとある部分(例えばアニメや日本のドラマまたは化粧品や薬品など)をとても評価しているタイプの人で、彼らは日本人がとても礼儀正しく、常に他人へ迷惑をかけないように人と接し、他人は私のために、私は他人のためにという状況が出来上がっていると考えている。

二つ目は、日本に対して比較的反感している人で、彼らは日本人が冷淡そして偽善的で、毎日礼儀がある振りを装っているがその実は陰湿だと考えている。

そして実際に日本人、特に一般の日本人やまたその家庭と関わり交流した後において、日本人の国民性について考える時、私は中国と日本という単純な区別の方法は捨てた方が良いと思う。なぜなら日本人の国民性とは、まず日本人それぞれの個人に対して確立されるもので、その上でこの国の社会や文化により次第に感化されるものだからである。人には喜怒哀楽があり、それは日本人も例外ではない。マナーや他人への思いやりといった文化が骨の髄まで染みて、それが一つの習慣となった時、私たちはそれを偽善だということはできないのである。彼らにも喜怒哀楽があり、また愚痴をこぼすことはある、ただネガティブな感情の際、彼らは自分の気持ちを考えるだけでなく他人の気持ちも考えるため、辛抱強く、また感情を抑えているように見えるのである。これが日本の国民性に対する私の最も本質的な理解である。

大学名： 對外經濟貿易大学

氏 名： 江涵

テーマ： 4.日中間の交流

今回の活動に参加する前から、私は日本人のマナーへの重視度合について聞いていたが、実際に日本に到着して私は初めてそれを実感することができた。

日本の人々のマナーへの重視度合は、実際のところ様々な要因が絡み合った結果であり、道徳やルールといった側面だけに留まるものでは絶対ではない。素晴らしい国民の素養、一流の教育水準、完全な社会や法律の制度、発達

した経済レベル、完備されたインフラなどの要素が、共に現在の日本人の世界において称賛されるマナーの良さというイメージをもたらしたのである。もし単純に「他人へ迷惑をかけない」ようにするとした場合、それは簡単に聞こえるが、実はそれには常に他人を思いやるという配慮を内包しているのである。私が日本に来て目にしたきれいな道路、清潔なトイレ、整然とした公共スペース、食事後に椅子を元に戻す、ごみのきれいな処理、これらは自然に形作られたものではなく、長きに渡るルールの教育や社会的宣伝の結果であり、また経済発展により人々の生活レベルが向上したことによりもたらされた、より高い精神面の追求の結果でもある。私たち中国には環境を代償とした経済発展の例は数多く、社会で共有すべきルールを脅かしながらも、それを気にしないことによりもたらされた物質を重んじ精神を軽んじる傾向もまた数多く存在する。ここで私たちは歩みを止めて、いかにしてバランス良く発展することが本当に必要で、さらに持続可能なものなのかを考えるべきだと思う。勿論これは私たちの問題であり、私たちも絶えず変化を追求し続けている。対外的な交流において私たちは、こうした変化を願い、また努力をしている姿勢を世界に伝えなければならない。交流を通じることで、私たちは日本を知り、また日本にも私たちを知ってもらわなければならないと思う。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 呉佳芮

テーマ： 4.日中間の交流

2016年5月24日、私は日本での7泊8日の訪問を開始した。日本という国について語る時、私たちの以前の教科書であれ、または歴史であれ、いずれも多くのネガティブな事実が存在している。昔、私たちが見たのは侵略者としての日本であるが、今現在、私の目の前には真実の、そして発展を遂げた日本がある。覚えるべきは覚え、水に流すべきは水に流し、学ぶべきは学ぶ、これこそ私たちが交流の際に厳守すべき原則である。

ホストファミリーとの交流の際、私は彼らの中国への多くの誤解に気が付いた。例えば私が現在北京在住という話をしたところ、彼らの最初の反応はPM2.5の数値がとて高く、環境もとてもひどく、生活には適さないというものであった。そこで私はすぐに彼らに対し、日本は島国なため埃は少ないが、北京は大陸なため埃が比較的多く、さらに現在北京も環境が改善されており、青空も常に見かけることができると説明したところ、彼らは自分たちの中国への認識が数十年前のものであると気が付いたのである。今回の経験を通じて私は、交流の際私たちは傲慢にも卑屈にもなってはいけなと気が付いた。私たちは、彼らの先進的技術や理念を学びに来てはいるが、一部の技術については実は私たちも優れたものを有しており、ただ私たちが知らないだけなのである。交流は双方向のものであり、平たく言うと、彼らを褒めつつ彼らからも褒められることが必要で、彼らに中国が一体どのような国なのかを知ってもらわなければならない。

今後こうした交流活動が増えていくことを願っている。日本への訪問だけでなく、中国への訪問も必要である。日本の先進的技術や非常に高い国民の素養、そして資源の節約という意識はもちろん私たちが学ばなければならないものだが、中国の発展と進歩についても日本の人々に知ってもらわなければならない。互いに学び、成長し合うことが必要ではないだろうか？

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 王雨薇

テーマ： 2.集団帰属意識の強さ

ここでは私にとって印象深かった2つの点から、日本の集団意識についての感想を述べたいと思う。

一つ目は、ホームステイの時に私がこれまで関心を持っていた日本企業の終身雇用制の問題について、ホストファザーと話をしていた時のことである。日本に比べ、中国の離職率は数倍も高く、転職は現在のほとんどの若者が経験しており、企業側も人材の流出を避けるための奨励制度を設けている。私がとても気になっていたのは、もしスタッフが解雇される心配がない場合、より良い企業へ転職するというモチベーションも生まれず、彼らは果たして全力で仕事と向き合うのか？ということであった。私のこうした疑問を聴いたホストファザーは驚いた表情を見せ、当然のような口ぶりで、努力をするのは当たり前のことではないのか？努力をしていない人はいるのか？と尋ねてきた。彼の反問に私はとっさに何と答えたらいいのか分からなかったが、この点から、私は各個人の会社への帰属感を垣間見ることができた。

二つ目は、島津製作所を訪問した時のことである。私たちが島津創業記念館の見学をしていた時、私は、とある点に気が付いた。島津製作所の創業当初はちょうど明治維新後であり、国は「殖産興業、教育立国」の政策を押し進めていた。そこで島津製作所の創業者は時代や国の求めに応じ、教育用の物理・化学計器の生産を開始し、そこから会社は商業の帝国と呼べるまでに発展したのである。この点から、私は各企業の国への帰属感を垣間見ることができた。

これは2つの些細なケースではあるが、私たちはそこから全体像を見ることができる。私たちは個人がいかに関業に貢献するか、企業がいかに関に貢献するかを目にすることができ、さらに利益共同体という集団主義についても知ることができた。このような日本という国が強くない理由はないのである。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 黄静

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

一国家の国民の精神の中にある優れた品性は、どのように培われるのか？それは明らかに幼少時から培われている。

私のホームステイ先は、一戸建て住宅に住む一般的な日本人家庭で、子供への教育も厳しく行われている。この一家には二人の女の子がいて、一人は8歳、もう一人は7歳といずれもまだ小学生でありながら、帰宅後にはまず先に手洗いをし、公共の場所でははしゃいだりせず、また大声を出さず、自発的にお客さんの手荷物を持ち、他人の妨げになった際はすぐに謝るなど、とても礼儀正しく、元気がありつつも賢いのである。それに対し、同年齢の中国の子供は日頃から「いたずらっ子」と呼ばれている。この他、日本の家庭では子供の自立性の育成にとっても気を使っている。外食の際、ホストマザーはお子さんに会計をさせていた。そして私が彼らの自宅にいる時は、お子さんに私を連れて家の中を案内させ、お風呂の準備や様々な注意点の説明についてもお子さんが対応していた。小さな頃からこうした訓練の中で成長した子供というのは、当然ながら親切で自信に溢れ、人や物事への対応がうまく、さらに物分かりが良く思いやりを持つのである。

この他にもまだまだたくさんある。ホストファザーは散歩の際に、お子さんへ色々な動植物について話し、環境保護の大切さを教え、ホストマザーはお子さんと私の記念アルバムを作っている時に、人と人との関係を大切にしよう教えていた。これらの素晴らしい気質の育成は、小さな頃から行うべきである。優秀な子供こそが一国の優れた未来を創ることができるのである。また本来礼節を重んじる国である中国は、反対にこうした教育を次第に軽視している。この点は真に私たちが考え、さらに日本に学ぶべきものだと思う。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 何鑫穎

テーマ： 4.日中間の交流

8日間のスケジュールはあっという間に終わった。この8日間の中には、多くの感動と驚きがあったが、最も多かったのは日本という国についてのより深い認識であった。

私が日記の中で述べたように、日本で最も感動させられたのは、この国が心から発する温もりである。彼らのあらゆる設計、すべてのわずかな所作、これらはいずれも彼らの他人への思いやりを表している。私は、中島さんの言った、日本の土地は私有地だからこそ皆が周囲の環境を含めて心から大切に扱い、自宅前の雪かきなどから始まり、日本の国全体の環境がとても整然としているのではないか、という言葉は言い得て妙だと思った。

国情が異なるため、中国では日本の人々のような丹精込めた保護はできないかもしれない。しかし私が言いたいのは、日本は必然的に多くの非常に進んだ面を持っているが、私たちは中国の実状を知らない状況において、自らを過小評価すべきではないということである。日本の企業は確かにとても現代化が進んでいるが、中国の企業自体も劣っているとは限らないのである。私たちは中国の工場や企業を実際に見たことがないのに、どうして中国は劣っていると簡単に言うことができるだろうか？今回日本に来てから、私は日本にも電車内で騒ぐ人や、あまり親切ではない人がいることに気が付いた。中日双方のメディアはあらゆる手段で双方のネガティブな情報を発信している。だから中国人の目には、日本は歴史を否定するがそれ以外は素晴らしい国となり、日本人の目には、中国は成金が多いが不衛生で乱雑で劣っている国となっているのである。

これはとても残念な事である。中日両国は世界における第二・第三のエコノミーであり、永遠の隣国として、もし互いが助け合い、また交流し、EUのような協力や共同発展といったアジア共同体を作ることができなければ、それはアジア全体ひいては世界にとっても非常に大きな損失である。

だからこそ私たちは、中日双方が互いを尊重し、より多くの本音で話ができる人が中日双方の交流に関わり、ますます多くの民間交流が両国の政治上のわだかまりを解消できるよう願っている。まさに大使館の薛参事官が述べたように、もし歴史に拘ってだけいれば、私たちはどうやって進歩、また発展し、さらに互いの経済低迷期を乗り越えることができるのだろうか、ということである。

私たちは見学者であり、また発信者でもある。中国はすでに胸を張って他国と付き合えるほど成長している。中国は現在、発展におけるボトルネックの時期にあるが、私たちは中国がいつか緑に溢れ、企業も100%のリサイクルを実現し、人々も自発的にごみの分類をするようになると信じている。

中日交流については、中日友好協会や中国日本商會が努力を続けているが、今回共に感じ、体験した私たちも努力をしていかなければならない。共に未来を歩んでいこう。

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 胥珂

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

中国には「百聞は一見に如かず」という言葉がある。日本語学院の学生である私は、これまで普段の勉強や生活において日本文化に関する多くの文献や映像などに触れ、また日本人の教師とも交流があり、日本や日本人というもの

について多少の認識があった。しかし今回の訪日では、私はさらに直に、また深く日本人について知ることができた。

まず電車内といった公共の場所では、これまで話に聞いていた誰もおしゃべりをする人がいないといった大げさなことはなかったが、皆は意識的にイヤホンの音量を下げ、子供が騒いだ場合は父母が小声でたしなめていた。但し地下鉄内では電話に出ないということについては、実際に体験することができた。私とホームステイ先のえりこさんが地下鉄に乗っていた際、彼女のお母さんから電話があったが、彼女は何のためらいもなく電話を切ったのである。その手慣れた動作から、私は彼らにとってこれは日常的事なことなのだと思う。さらに日本では自動車が歩行者に道を譲るが、こうした点は中国ではまだまです、日本に学ぶべきだと思う。そして他人へ迷惑をかけない、他人を思いやる心である。随行撮影の監督さんが、私の足が靴擦れしたのに気付いて絆創膏を買ってくれ、えりこさんのお宅に戻った後、えりこさんは薬を塗ってくれた。そして次の日散歩に出かける際、えりこさんのお母さんはわざわざサンダルを準備してくれた。これには少し申し訳なく思ったが、また心が温かくなる思いもした。そして私たちも、いかなる場合においても他人の気持ちを思いやり、他人の立場になって物事を考えなければならないと思った。こうした「思いやり」の心は、人と人との距離をさらに近づけることができるのである。

松本楼の小坂女史からの紹介にあった梅屋庄吉氏と孫中山氏の友情と同様、中日両国の人々が友人となりさえすれば、国と国の関係もきっとより打ち解けると信じている。また、私たちのような大学生が日本を訪問する以外にも、私たちをもてなしてくれたご家族が中国を訪問、または日本の大学生が中国に見学に訪れるような機会があることを願っている。まさに中国大使館の薛参事官のお話にあったように、交流とは双方向のものでなければならず、そうしてこそ互いが情報の不均衡や偏りによる誤解を避けることができるのである。この「走近日企・感受日本」の活動は本当に素晴らしい活動であり、今回の活動に携わった中国側・日本側双方に心から感謝したい。私は、いつかきっとこうした努力が実を結ぶ日が来ると思う。

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 熊瑋

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本人の「思いやり」に対する私の理解を紹介したいと思う。私は今日の歓送会の席上、「人という生き物は互いに支え合い、助け合うことでのみ生存が可能である。孤島(孤独)でいられる人はいない。他人の角度や立場に立って物事を考え他人を手助けする、これがつまり『思いやり』の意味するところである」と発言した。

他人を手助けする光景は至る所で見られる。段差を登れない障害者を登れるよう手助けする、商品が見つからないお客さんが商品を見つけられるよう手助けする、しかもお客さんを自らその場所へと案内する、他人のためエレベーターのドアを支えるなど、こうした「思いやり」に溢れた状況はたくさんある。日本では、誰も「孤島(孤独)」ではなく、彼らは一体となっており、「大きな島」だと言える。

ホームステイの二日間、私のホストファザーの他人への思いやりには驚かされた。私は静かな環境が好きだと言っていたので、二日目、彼はなんと私の休憩の妨げにならないようテレビの音を消していたのである。また私が家庭的な味を味わいたいと言うと、彼は自らうどんを作ってくれ、私が普段の本当の日本の様子を知りたいと言うと、彼は私を屋上の公園に案内してくれ、そこで東京の人波を見ながら、静かに人生について語り合ったのである。こうした感覚は言葉では表現することが難しく、まるで風が吹き、急に眠気が襲い、うとうとするも、たとえそれが荒野でも心が落ち着くような感覚であった。

「予人玫瑰、手有余香」(バラを他人へ贈っても、自分の手には良い香りが残る。他人を手助けすれば自分もまた楽しい、の意)。つまり、日本とはこうした芳しい国である。日本でこのような経験ができた私は、今回体験し、また感じたことのすべてを帰国後に紹介することが今から待ちきれない。

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 鄒璐璐

テーマ： 4.日中間の交流

今回の交流活動の中で、私にとって最も印象深かったのはホームステイであった。日本の一般家庭において交流ができたことで、私はこのホストファミリーの私への友好的な態度を感じた他、さらに普段の会話の中から日中両国の共通点や相違点を見つけ出すことができ、互いに相手国への興味を示すことができた。私は、これもまた両国の友好的な付き合いにおけるスタートと言えるのではないかと思う。

日中間の交流について言えば、今回の訪日を通じて、企業や大学との交流では、多くの私たちが学ぶべき点を見た他、共通点や相違点も見つかった。私は、互いに交流し学び合ってこそ共に発展していくことができと思う。これがつまり交流の本質である。もちろん交流は双方向のものでなければならず、互いに理解し合ってこそ、持続可能な発展ができるのである。

中国の人口は15億に達し、日本も1億3千万の人口を有している。また未解決の歴史問題などがあり、部分的に対立が存在するのも理解できる。もちろん、その際一番してはいけないことは、対立自体を見て見ぬ振りをするることであり、この時に交流の重要性が表れてくる。交流を通じて、各自が最大限の努力によって問題を解決してこそ、互いが仲良く、長きに渡り平和的に付き合うことができるのである。

関連データによると、現在中国における日本への旅行者の数は、日本における中国への旅行者の数の2倍以上で、これはちょうど10数年前とは逆の状況となっている。中国人旅行客が爆買いをするといったニュースも多く見かけるが、良い面からみると、中国人が日本へ行くことを好んでおり、これも両国間の交流を大きく促進していると言える。同時に、両国が派遣する友好交流団なども次第に増えており、国民間の交流の可能性を高めている。

確かに忘れてはいけない事もあるが、そうした事は日頃から触れるべきものではなく、やはり前向きにならなければいけない。そのため、中日両国がどのように発展しようとも、最も重要なのはやはり交流なのである。

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 許禄野

テーマ： 1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

4.日中間の交流

今回の8日間の訪問の旅を通じて、日本への認識をより深めることができた。私は日本語を専攻しており、かねてから日本の国民性についてはある程度知っていたが、私は彼らの高い団結力やマナーは驚くべきものだと感じていただけであった。そして今回の8日間の観察を通じて、私を驚かせた彼らの品性の源を理解することができた。

企業への訪問やホームステイ時のバーベキューなどから、私は日本人それぞれにある強い自己アイデンティティを感じる事ができた。これは私たちが日常言う自惚れとは異なる一種の簡単な存在感である。役職の高さや低さは関係なく、皆が自分のすべきことをこつこつと行っている。日本人は、自分のすべきことをやり遂げれば、より素晴らしい環境を構築できると信じており、これも正に日本人が他人へ迷惑をかけることを嫌う理由である。この他、日本人の礼儀について強く感じる事ができた。たとえ夫婦間であろうと、常に「ごめんなさい、ありがとう」などの言葉を口にしていた。私のホストファミリーには一歳半になる女の子がいて、ホストマザーが子供をあやし終えたと、ホストファザーは申し訳なさそうに「ごめんなさい、お疲れ様」と声をかけた。これは中国では絶対見かけることがない光景である。

礼儀はすでに日本人に染みついているものであり、これも私が感服した点である。

次に、今回の訪日では交流の重要性について感じる事ができた。こうした簡単で友好的な国民間の交流は、充分に双方を感動させ、互いの相手への印象を変えることができるのである。こうした行いは偉大であり、多くの意義を持っている。中日両国は一衣帯水の友好的な隣国同士であり、国民の交流が盛んになっている今日、中日両国間の経済、政治、文化といった各方面の交流の強化もその必要に迫られている。今回の交流を通じて、私にはこれまで以上に中日両国が必ず友好的な付き合いができるという確固とした信念が生まれ、また中日友好に対して自分の力を捧げるという志を立てることができた。

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 袁偉傑

テーマ： 4.日中間の交流

「学生たちの観た日本」について書く時、まず私は何を「テーマ」とすべきか考えた。正に私たちがこの数日間において自ら日本に身を置き、日本の企業や家庭に溶け込み、観察し感じたたくさんの事であり、ここでは簡単にしか述べる事ができない。

日中間の交流について述べてみたい。京都大学と早稲田大学の同世代の人間同士の交流を例にすると、私は言語と交流は、絶対的に人と人との間、また国と国との間にある壁を取り除くための鍵であることに気が付いた。今回日本を訪れた学生の中で日本語を学んでいる人は日本語で交流し、日本語ができない人は英語で交流したが、いずれの言語であっても、外国語の一つ以上精通することの重要性を認識することができた。現在は若い世代の交流がより重要視されており、王先生や朱団長も若者には無限の可能性があると話をされ、しかも日本の大学生は思考が幅広く、他人との交流や中日間の友好促進を望んでいる。私はもし日中間において若い世代の人々の相互交流が強まれば、中日間の関係はますます良くなると思う。それから企業での交流について言えば、企業のスタッフとの交流では、現在の中国市場の日本企業における重要性がいかに高いかを知ることができた。多くの企業は自社スタッフに中国語を習わせ、さらに研修のため中国に派遣しているのである。

いずれにしても、中日間の交流は両国の発展に直接関わるものであり、こうした良好な交流を維持していけば、両国関係は今後さらに堅固になると私は思う。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 龍順欣

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

「走近日企・感受日本」の文字通り、今回の交流活動のスケジュールは企業見学が主で、さらに学校間交流やホームステイなどが加わったものであった。8日間の活動において見聞きし、また感じたことのすべては、私にとある共通した一つの感覚をもたらした。それは、日本が百年以上の発展により積み重ねてきた資本や優位性は多種多様で、そうした各方面の資本や優位性は、日本人一人ひとりに反映されており、特に彼らの素養や教育レベルに反映されてい

るということである。

私たちが見学した企業や工場には、みずほ銀行のような巨大金融機関もあれば、島津製作所のような優れたハイテク企業もあった。また伊藤忠商事では、日本最大規模の総合商社の本部についての見識を広め、アサヒビール神奈川工場では、市場や消費者の生活に密着した飲み物の生産ラインを目の当たりにした。しかし役職の高さや仕事の内容とは関係なしに、すべての日本人からは同様の友好的態度や集中力を感じることができた。友好的態度は、私たちゲストへのもてなしや、会社の同僚同士の交流や協力といった面にも表れている。集中力は、即ち日本人の仕事に対する最も基本的な精神状態である。このような企業組織やスタッフの状態の企業に対する最も顕著な影響は、各生産・経営段階への重視である。つまり経営陣だけでなく同様に現場も重視し、さらに商品の生産だけでなく廃棄物の回収処理も同様に重視している。実のところ、日本人のこうした仕事への態度や人間関係といった組織については、私たちは早くから耳にしていた。しかし実際にそれを経験して、日本人の友好や集中力の度合、またこれらの普遍性が私たちの想像を超え、私たち中国人とはかなり違う程度に達しているということが分かった。そのため、私たちはこうした「国民性」への認識を、私たちにとって一般的な「高い基準で自分を律する」ことにおける「克己復礼」のレベルに留めてはならず、その背後にある日本特有の歴史的・社会的原因を探らなければならない。

一個人にとって、世界観の確立は常に現在の社会の影響を受けており、その形成には数年または数十年が必要で、しかも一旦形成された後は変わることは難しい。これは、人口の絶対値が膨大な中国全体の変化には、時間が必要だということを意味している。そのため、私たちは一方では自らを卑下する必要はなく、もう一方では功をあげる必要はないのである。来るべきものはいつか必ず来るのであり、歴史の判断は常に私たちよりも正確なのである。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 李欣竹

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

わずか約一週間の活動ではあったが、私が日本人について最も印象深かったのはマナーである。フライトアテンダントやホテルのサービススタッフといった人から、一般の日本人まで、すべての日本人は礼儀正しかった。関西国際空港で私が不注意でとある女性にぶつかってしまった時、私が謝ろうとするより先に彼女が私に謝ってきた。そしてホームステイでは、優しくて気立てのよい日本女性とは何なのかを本当の意味で知ることができた。一家全員私に良くしてくれ、嫌な顔一つせず二人のお子さんを連れて私の買い物に付き合ってくれた。また4歳の娘さんは特に、あちこち歩き回っても泣き叫んだり、熱がったり、疲れたりした様子も見せていなかった。また外出の間、私はホストファザーに日本人は外を歩いている時には物を食べたり、たばこを吸ったりしない事について聞いてみたが、最初は彼も特に意識していなかった。おそらくこれは、習わしが広まって一般的になった日本人としての簡単なマナーなのであろう。

日本人は他人への真の思いやりを心得ている。全体的に日本の道路はとても綺麗であり、繁華街や公衆トイレでさえも例外ではない。ほとんどすべてのトイレには使用音をマスキングする「水の流れる音」の擬音装置があり、すべてのエレベーターには障害者用のボタンや音声表示が備え付けられている。また銭湯内には日用品が一式備え付けられ、浴場の外には化粧台があり、その上には思いつく限りのスキンケア商品が置かれていた。一般のホテルやレストランのトイレのとなりにも女性専用の化粧直しのための部屋があるなど、これらは中国では中々見かけないものである。さらに、日本人は環境保全や資源の循環利用などの面でも努力を続けている。各家庭はごみの分類をしっかりと行っており、科学スタッフは絶えず新たな技術を開発し、ひいては多くの企業において、すでに廃棄物の100%循環再利用を実現している。こうした意識は、いずれも日本の人間本位の度合を証明している。またこうした人間本位といったものは、日本人に深く根ざしている素養の表れである。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 申成日

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

細かな視点から今後ますます中国でニーズが高まる日本の技術を考える時、以下の数点からそれが可能である。

まず初めに、中国と日本はその経済規模において世界の2位と3位である。中国は人口の多さ、日本は技術において名高い。グローバル化が今日まで進んでいる中、アジアに身を置く中日両国の協力は必然的なものである。中国は現段階では発展途上国家であり、日本は先進国家である。現在流行のAI技術、電子技術、超伝導技術、材料技術、ナノテクノロジー、鉄鋼技術などの日本の技術の大部分(多方面)は中国より優れており、中国には多くの労働力がある。また日本の国土は小さく、人口が多く、労働力や土地の価格、原材料費は中国よりはるかに高い。そのため、日本のハイテクノロジーは必然的に中国などの労働力が豊富にある国の協力を必要とする。

現段階では日本企業が中国に進出しているのがほとんどで、中国企業が日本へ進出する状況は少ない。また中国は多くの面で日本の技術や制度に依存している。今回日本での見学を通じて、日本企業の制度が彼ら企業の土台としてどれほど重要なかが分かった。

中国は現在、産業の革新に力を入れているが、たくさんの新技術の開発という道程は長く険しいものであり、外国の核心技術の導入を必要としている。中国は新たな時代、自主革新の時代に向かわねばならない。そのためには絶えず自身のイノベーション能力を高めなければならず、こうした面において日本に学ぶべきだと思う。

中国の今後の発展には私たち若い世代がその中心的役割を発揮し、科学技術の発展を大きく推進し、さらにグローバル化の時代において国際的協力を積極的に模索しなければならない。中国は必ず日本と良いパートナー関係を構築できると信じている。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 鄭縁童

テーマ： 2.集団帰属意識の強さ

私たちの今回の活動のメインテーマは即ち「走近日企・感受日本」である。この8日間、私たちは様々な分野の企業を見学したが、最も印象深かったのは日本人の集団帰属意識の強さであった。それは正に評論家の加藤周一氏が言うところの「集団を超える絶対的価値への信仰が成立しがたいだろう。」であり、考え方においては、日本人には強い集団帰属意識があり、人々は常に自分が集団の一員であることを意識し、「自我」は社会的集団として表れる。個人は何かしらの集団に属さなければならず、集団のメンバーは一種の共通の運命や利益によってつながっているのである。

アサヒビール工場を例にすると、私たちが工場の生産ラインを見学していた際、工場のスタッフの人数はさほど多くはなかったが、各スタッフは自分の担当段階の生産業務がスムーズに運ぶよう、自分の持ち場で真剣に業務を行っていた。こうした個人的価値の実現は主に集団に従うことにあるという考え方は、日本人が中国人や欧米人と最も異なる部分だと言える。

この他、企業の内部を除き、学校または社会生活の中において比較的個人の争いを避け、集団的行動を重視しているように見受けられた。日本では人々は常に自分を集団の中に置き、欧米人は極力常に自分と他人との違いを見せようとする。日本人は常にあらゆる手段で皆と同じであることを強調し、一人目立つことを嫌がる。そして社会の主流を見極め、自分がその中に溶け込めば必ず成功するという原則を固く信じている。

こうした集団への帰属意識は日本人のあらゆる物事から表れており、直に日本に来てこそ感じるができるものである。日本と中国との違いについては私たちがさらに発掘そして体験していかなければならない。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 底家銘

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

私は今回の「走近日企・感受日本」活動における様々な観察や交流を通じて、「日中間の交流」や「マナーの良さと思いやり」という二つの面で印象深いものがあつたので、ここではそれについて述べたいと思う。

今回の活動を終え中国に戻り、家族から日本人への印象について聞かれた私は、彼らに対し「日本人はとてもマナーが良く礼儀正しい」と答えた。これは外国人の私が日本人と交流をして感じた最も直接的な印象である。いくつか例を挙げると、道を歩く時は自然と左側を歩き、エレベーターに乗る際は自動的にドアを開くボタンを押し、毎朝道ですれ違う人には面識の有無にかかわらず挨拶をする、などである。これは私が見たほんの一部であり、他にもたくさんの小さな習慣が日本人それぞれに根付いている。これはすでに私たち中国人が考えるところの礼儀と言うよりかは、ある種の風習や習慣に近く、生まれながらにして持っている、変わらないものであり、私は感服せずにはいられなかった。しかも多数の人が少数の人を感化することで好循環を起こし、社会全体に素晴らしい気風が満ちている。

松本楼に到着するまでは、私はそれまで孫中山氏と梅屋庄吉氏との間にこれほど深い友情が存在していたとは思ってもいなかったが、これもまた中日両国の民間友好交流の証しである。京都大学や早稲田大学ではいずれも、中国人学生を積極的に募集しており、これまでの敷居を下げている。また私にも日本で学んでいる多くの中国人学生の知合いがいる。こうした点も中日間の交流が現在若年化の発展傾向にあることを証明しており、中日両国の民間交流において大きな良い影響をもたらすに違いない。

大学名： 北京工業大学

氏 名： 楊中清

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本の空港に到着したその時から、私は日本の至るところで他人を思いやる素晴らしい素養を感じていた。例えば電車やエスカレーターに乗る際は一列に並び、公共の乗り物に乗る際は携帯電話をマナーモードにし、大声で騒いだりはしない。そして道路を横断する際は自動車が歩行者へ道を譲るなど、こうした一つひとつの点はいずれも日本人の他人への思いやりの表れである。またこれらの習慣以外に、ホームステイの際、私は日本人がとても礼儀に気を付けていると感じた。夫婦や親子の間でも、「ありがとう」は常に使う言葉である。誰かが自分を手助けした際、双方がお礼とそれへの返答を述べ、ほぼすべての交流の終わりには、ありがとうの言葉がある。それに対し中国は日本ほど頻繁ではなく、多くの場合、身内が互いに助け合うのは当然だと考えている。この他、日本人のおもてなしといったものも極めて盛大であり、たとえ親しい人であっても、彼らはおもてなしに手を抜くことはなく、相手を大切な客としてもてなす。これが初めて家を訪れる客であれば尚のことであり、彼らは心を込めてもてなし、食事なども豪勢で、客用の食器や座席の位置などは彼ら自身と異なっている。

またさらに感服させられた点としては日本人の客への贈り物の習慣である。こうした贈り物からは彼らの真心や友情

が感じられ、贈り物はその中身より心遣いであるということを実践している。

お年寄りへの接し方の面では、若い人皆がお年寄りを敬っている。外では学生が面識のないお年寄りに出くわすと、すすんで会釈や挨拶をするなど、これは中国における光景とは明らかに異なっている。中国人が他人または面識のない人と互いに笑顔を見せることは非常に少ない。

こうしたマナーと生活における細かい点は、いずれも中国の人々が高めていかなければならない点である。感謝を多く伝え、騒ぐことを減らし、他人を思いやり、共に素晴らしい気風を構築していきたいものである。

大学名： 北京工業大学

氏 名： 曾 檬

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

初めての訪日ということもあり、私は多くの想像と共に訪れたが、今回の訪日ではたくさんの収穫を得ることができた。夢へと誘う国、幼少の頃から強く憧れていたが、これまで実際に体験することはなかった。そして今回実際に日本を体験してはじめて、自分の想像通りだった部分と、異なっていた部分が分かった。以下私の感想を述べたいと思う。

日本は非常に礼儀を重んじる国であり、お客に対してだけではなく、同僚や部下、友人などにも例外はなく、例えば赤の他人に対してもそうである。京都では、私がバスの中から外を見ていたら、車の中にいた女性が笑顔で私に向かって手を振り挨拶をしてくれた。また混み合う道路では皆が互いに道を譲り合っていた。日本に来る前、私はこうした礼儀はわざとらしいと思っていたが、実際に身を以て経験すると、こうした礼儀正しさは決してわざとらしいわけではなく、一種の心の穏やかさによるものだとなった。平常心だからこそ、また自分を重んじて自分を愛しているからこそ、他人をも尊重し、相手の身分や業種、年齢などを問わず、すべて同様の礼儀を尽くすのである。それはまるで、梢から桜が花開き、清らかな風が谷間をかすめ、温泉が岩の間からゆっくりと流れ出るかのように、自然で穏やかなのである。

こうしたおごり高ぶらない性格の前提は確かな物質的基礎であり、私は中国についても、経済の成長や精神文化への要求の高まりにより、必ず次第に穏やかさや柔軟性を持つようになると信じている。

大学名： 北京工業大学

氏 名： 于鑫淼

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

8日間の訪日活動はすでに終わった。わずかの期間ではあったが、私たちは多くの収穫を得ることができた。

エスカレーターに乗る際、日本の人々は整然と列を作り、また皆左側に立ち、右側は道を急ぐ人のために空けている。公共の場所では日本人はとても静かで、他人を煩わせることはしない。日本は街路や住宅あるいは工場や企業であれ、とても綺麗である。

ホームステイでは居間の向かいの和室に寝泊まりしたが、直美さんや隆康さんは私が良く休めるようにと、私が目覚めるまで居間には入らなかった。朝私が彼らに挨拶すると、彼らもすぐに挨拶を返してくれた。また私が和食に馴染めないのを気にかけて隆康さんは、わざわざ麻婆豆腐を作ってくれた。

渋谷では少し道に迷ってしまい、周囲の人に道を尋ねたところ、彼らは皆とても親切に道を教えてくれ、嫌がったり無視したりする人はいなかった。また私が遅刻したため、車内の人は皆私を待っていて、運転手も車の傍で私を待つ

ていたが、運転手には不満げな表情は見られなかった。

日本の大学生との交流では、私たちは彼らにプレゼントを贈ったが、彼らはそれを受け取ると心からお礼を言い、中身が何であれ、とても嬉しそうであった。

私たちが見学に訪れたそれぞれの場所では、見学を終えその場を離れる際には、企業のスタッフであれ学生であれ、またはホストファミリーのご家族であれ、いずれも私たちに手を振ってお別れをするなど、彼らの誠意に私たちは心を打たれた。

私のホストマザーはとても心が繊細な方であった。歓送会の席上でも常に私を気遣い、私たちが一緒に遊んだ際の写真を現像して私にプレゼントしてくれた。これにはとても感動させられた。これらの写真はこれからも大切にしたいと思う。

学習とはお互いのものである。遥か昔、日本は中国に学んだが、現在日本は非常に発展した国となっており、今後は私たちが日本の良い面を学ばなければならない。

中国は「礼儀の国」の名で知られている。私たちは祖先の礼儀というものを継承していかなければならない。

大学名： 北京工業大学

氏 名： 尚芳

テーマ： 1.国民性についての理解

4.日中間の交流

国民性についての理解:私はこれまで国民性というものについて、国民が有すべき権利を享受することだと思っていたが、今回日本での体験を通じて、私は国民性とは互いに相手を思いやるという精神だと考えるようになった。日本は国土面積に限りがあり、特に東京では家屋面積も小さいが、パブリックシアターなど公共の場所の面積は、逆にとても大きい。これは日本の国民が、自身の快適さよりも大衆社会そのものをより気にかけているということを表している。

日中間の交流:日中両国には長い交流の歴史があり、以前は多くの日本人が中国を訪れていたが、現在では多くの中国人が日本を訪れ、日本人は逆に中国へ行く機会は少なくなっている。私は、交流とは必ず双方のものでなければならないと思う。昔に多くの日本人が中国を訪れた際、中国は現在のような発展を遂げておらず、彼らの中国への印象は20～30年前のもので止まっている。そして中国の多くの年配の人々は日本を訪れたことがなく、本当の日本とはどういったものなのかを知らない。そのため私たちがすべきは、双方の交流であり、より多くの日本人に中国へ来てもらい、同時に本当の日本の様子を周囲の人々に紹介することである。

学生たちの撮った写真



女性被験者の声を反映し設計されたエルマンモ



創業期の社屋 創業記念資料館の横を歩く



階段教室で、韓先生から、大学紹介を聴く



AI問題の討論会にて、臆せず発言する



討論会を終え、時計台の前で、全員で記念撮影



雨中嵐山 周総理の胸中を思いつつ、記念撮影



初めて見る金閣寺を背景に、押すな押すなで一枚



三島に向かうひかり号の車中 富士山は見えなかった残念！



雨上がりの県立恩賜箱根公園を散策、空気が新鮮！



浴衣姿で宴会、各校の出し物が披露された



ビールは、自然からの贈り物、工場は、環境を創造して、自然にお返しをする



出来立てのビールが、こんなにも旨いものか！驚きをもって飲み干す



小坂副社長から、孫文と梅屋庄吉の交友歴を聴く



孫文夫人 宋慶齡の弾いたピアノに見入る



寺澤マネージャーが 闊達な中国語で、沿革、事業内容を語られた



懇親会席上 岡本代表取締役専務と朱丹団長が固い握手



広瀬中国営業推進部長から中国事業の歴史を聴く



交流会席上 菅野専務執行役員のご挨拶



薛劍政治部公使参事官から、国民交流が大切とお話が
あった



大使館の玄関前で記念撮影



白木三秀教授の司会 テーマは、将来のキャリア計画
と最近読んだ面白い本



大教室の随所で、白木ゼミの学生と団員の討論が始ま
った



討論を終えて、懇親会に移り、白木教授から 乾杯の
音頭



エコツアー 厨房排水のバイオ処理過程を見る



ホテルから出る生ゴミは、100%リサイクル 堆肥になる



中国で最も有名な日本人俳優 矢野浩二さんが、飛び入り参加 皆 驚愕！



民族衣装の学生も交じって、全員で団歌「我相信」を大合唱



ホームステイ家族も交えて記念撮影

ホームステイ



ご家族全員と、写真に入る



昼ごはんは、大好物のお寿司



浅草の仲見世で 接写！



晴れた朝 門前でご夫妻と一枚



上野の国立西洋美術館 考える人になってみる



茶道のお手前も 実に堂に入ったもの